

---

# 十二のBSIS

@mia

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

十二のBSIS

### 【Nコード】

N3537Y

### 【作者名】

@mia

### 【あらすじ】

日本とロシアのハーフである主人公が誕生石のコアを用いられて作られた特別なIS、その名を『BSIS』という。そしてそれを乗り回し色々とする話。

姉との因縁、女ばかりの学園、迫り来る様々な敵……。

主人公はこの学園でどういった青春を送るのか！！

## 設定集（前書き）

B S I S を読むにあたって、分からないことが色々あると思うんでオリジナル設定のところだけでも記載することに。

ちなみに、後に出てくる I S のスペック D A T A はあくまで私の想像でしかないのであしからず。

（ H 2 3 ・ 1 1 ・ 2 3 D A T A 更新 ）

## 設定集

日崎ヴァデーム

国籍 ロシア

性別 男

身長 176cm

誕生日 五月一日

髪型 セミショート（色はアッシュグレイ）  
瞳色 碧色。

日本（父親）とロシア（母親）のハーフ

母親は元代表候補生。

父親はIS専用プログラマー。

世界でISを扱える二人目の男子。

性格は明るめ、女子にも男子にもこのまれそうなタイプ。

一夏の同居人である。

一夏同様に専用機持ちだが候補生でない。

【イズムルート・フスプイシカ】（翠玉の閃光）

ヴァデームの専用機。

機動力は世界トップ5の中に入り、特に加速度においては世界一。

速さに重点を置いているので、近接武器の扱いに長ける。

さらに誕生石のコアによる補正で一瞬ながら音速を超える速さで動くことも可能。

誕生石【エメラルド】を持つB S I S。

スペックDATA

攻撃力B (近接S 射撃C)

防御力B (機体B 回避A)

燃費B

機動力S (最高速度A 加速度S)

熟練度C

特殊性能C (一覽 ・連続瞬時加速 ・絶対回避)

総合戦力 B

#### 搭載武器一覧

・ヴェーチエル、リョートウ

部類 ツインダガー

非実体武器

ヴェーチエルは【風】、リョートウは【氷】を指す。

刃渡りは約50センチにも満たないが、二つを合わせて長くすることが可能。

さらにエネルギーを増幅することでも刃の調節が可能

・翡翠

部類 日本刀

実体武器

刃渡りは約一M、ISが用いる日本刀の中では短い方。居合をするために鞘も展開することが可能。

スィーティー・ブリーヤ

・灰色の嵐

部類 二丁拳銃

実体武器

何の変哲もない自動式拳銃（イメージとしてはマカロフPMをIS用にしたもの、さらにはイズムルート用に改良したもの）、生身の人間でも携帯できる。普通の拳銃より威力が爆発的に高い。

→マガジンに八発

特殊性能一覧

マルチイグニッションブースト

・連続瞬時加速

瞬時加速を連続して行い、不可能かと思われた曲線行動が可能となっている。

しかし、曲線行動はエネルギーを大幅に消費するため、ヴァディムはあまり好んでない。

直線行動と完全停止の繰り返しを行うことで、相手のセンサーの錯乱をすることも可能。

・絶対回避

シールドエネルギーを消費することで、実体非実体に関わらずほぼ全ての攻撃を避けることが可能。

が、普通に受けた方がエネルギーの消費が少なくて済むという機会がすくなくないので、使い所は考え物。

誕生石のコア

世界に十二しかないB S I Sのコアで、その名の通り十二の誕生石がモチーフ。

それで作られたISはBSISと呼ばれ、それらはどの国にも属さないが、原則その所有者の国籍のISとして扱われる。

が、国家が実験などに使うことは東博士が全禁止している。

コア自身に自我があり（いまだ会話が試みられたことはない）、操縦者を選ぶ。

機体は既に製作が終了しているがいまだに操縦者が現れないコアも何個がある。

普通のISの用に成長していくので、完成はないとされている。

誕生石のコア一覧《内は所有者の国籍

- 一月
- 二月
- 三月
- 四月
- 五月 エメラルド《露》
- 六月
- 七月 ルビー《日》
- 八月
- 九月
- 十月
- 十一月 トパーズ 《無》
- 十二月

## プロローグ

「母さん。俺、ようやくスタートラインに立てたよ」

母さんがいなくなつて、もう七年が経つ。同時に、姉さんを恨み続けて七年が経つ。

あの夜、姉さんは俺を殺さなかった。あえてそうしたのは明確だった、姉さんは誰よりも“喜劇”を楽しむ人だった。

母さんを殺して、尚且つそれを“喜劇”の始まりと叫んだ姉の顔は今でも忘れられない。

IS……。母さんが好きだった物、姉さんが殺しの道具として使った物、そして何よりそのISで、俺は姉さんに打ち勝つ。

まさか、俺までISに乗れる日がくるなんて思いもしなかった。しかも専用機まで用意されているとは、父さんに感謝しないといけない。

日本人でありながら、ロシア軍のISプログラマーをしている父さん。七年前に作った父さんの二つ最高傑作の内、一つは姉さんがもう一つは俺が受け持った。

当初から、俺が受け持つ予定だったらしいがいかんせん動いてくれなかった。

母さんのコアを使うまでは。

死ぬ前までロシア代表生だった母さん、その母さんのISの主力武器であったツインダガー、“風の刃”<sup>ヴェーチエル</sup>と“氷の刃”<sup>リョートウ</sup>を待機状態のISに添付する。

ロシアの“凍える風”<sup>ヴェーチエリョ・リョートウ</sup>、それが母さんの二つ名だった。

“イズムルート・フスプイシカ”

ロシア語で“翠玉の閃光”と呼ばれ、機動力に長けた近接戦闘万歳な俺の相棒だ。

待機状態のイズムルートは、ペンダントとして俺は身につけている。自分の誕生石でもあるので、何故だかはわからないけど安心感がある。

「母さん……。俺、そろそろ行くよ」

最後に母さんとの思い出を少しだけ思い出してから、俺はこの家をでた。

プロローグ

～オワリノハジマリ～

インファイニット・ストラトス  
IS、それは世界のどの兵器よりも総合戦力で勝る兵器であることは、既に証明されている。

何故か女性だけが扱え、男性にはピクリとも反応しないらしい。にも関わらず、世界で“唯一ISが使える男子”それが、織斑一夏だった。

今回はラッキーとしか言いようがない。秘密裏で行うには限界があるし、ISが使える男子が一人でたってもう数人いてもおかしくはないはず。

怪しまれるのを防ぐために、少し転校を遅らせる必要があったが、まあいいだろう。

「じゃあ、行ってくるよ」

誰もいない家にしばしの別れを告げて、俺は家を飛び出した。

ここからIS学園までは電車で一時間程かかる、徒歩の時間を含めると一時間半になる。

今回はIS学園から迎えがくる手筈がついていたので、気が楽なはずだったんだが……。

何故か家の前には黒塗りの外車が止まっていて、それはこの空間には異質なものだった。

俺が啞然としている内に、後部座席から一人の女性が降り立った。一目みてただ者ではないという気配を感じとった俺は、思わず警戒体制をとってしまった。

「やあやあ、気が日崎ヴァンディム君だね。その体制は正解だけど、今は下ろして……ね」

顔と声は笑っていたが、眼は笑っていなかった。

「あ、はい。すみません」

「意外と日本語流暢なのね」

俺が警戒体制をとった途端に、ようやく自然体を見せたこの女性は専用機保持者みたいだった。

「えっと、どちら様ですか」

「私は更織楯無、IS学園の生徒会長であり学園の長」

凜、とした立ち振る舞いで会長は続けた。

「つまり、学園では最強ってこと」

更織先輩、と言おうとすると楯無でいいとのことだった。

「楯無先輩はどうしてここにいるんですか」

「ん、私はとある任務の帰り。折角だから転入生でしかも男子な君を一目見たくてね」

それから視線を上から下に移動させて、また上に戻す。

「ふうん、面白いね」

「一体これで何かわかるんですか」

答える代わりに先輩は微笑みを返し、それについては何も言わなかった。

「ささ、早く乗った乗った」

楯無先輩に背中を押されて、黒塗りの車に乗る。中は見たことないぐらい広いし、座席もかなり高級そうだった。

「すごいですね、この車」

「まあ、君はお客さんみたいなものだからね」

それからも色々と会話しながら、しみじみと高級車の感覚を味わっていた。

これから、新しい日常が始まる。そう思えるだけ、今は楽しめそうだったことだな。

## プロローグ（後書き）

えっと、@miaです。

以後よろしく願います。

……アニメもだいぶ前に終わったし、原作はもう半年も出てないし、  
需要ってあるのか？

いや、私の需要がある（笑）

次回からさっそく戦闘に入っていきますよ。

## 第一話 翠玉の閃光

「皆さん、今日は転入生を紹介します」

「またこのクラス？」

「今度はどんな可愛い子かな」

「きっと候補生なんだろうね」

「静かに、それでは紹介しますね」

教室のドアを開けて中に入る。すると、教室内が一瞬静かになる……が。

「」「きやあああ」「」

と思うと大多数の女子が騒ぎ始めた。

「えっ、何。男じゃん」

「織斑君だけじゃないの？」

「しかもまた美少年」

この教室の騒ぎに一切動じないのが一人だけいた。

「お前ら、静かにしろ」

織斑千冬、織斑一夏の姉であり、元チャンピオン。

「織斑……千冬、さん」

「ん、流石に私は知ってるか」

話を聞くところによると今はここで先生となっているらしい、てか、先生だ。まあ、妥当なところだろう。

優秀な選手ほど優秀なコーチはいない、と俺は思っている。

「さて、自己紹介してもらおうか」

軽く返事をしてから、教卓に向かう。そして黒板に自分の簡易プロフィールを表示させてから、自己紹介をする。

「えっと、名前は日崎ヴァディム、歳は十六。母さんはロシア人で、父さんは日本人。一応世界でESが使える男子ってことになってます」

最後によろしく、とだけ付け加えると教室がまた沸く。

## 第一話

く 翠玉の閃光く

「えっと、日崎君だっけ」

「織斑一夏か、俺のことはヴァディム、呼びにくいならヴァンで」

「おう、俺のことは一夏って呼んでくれ。いやあ、これで男子三人目が来てくれて助かったよ」

「三人……？」

データにはそんなことは記載されていない、ISの部分展開してからデータベース検索を行ったが、結果は同じだった。

「やあ、僕はシャルル・デュノア」

「……日崎ヴァディムだ。あと、少しいいか？」

上を指しながら、二人に言う。

「屋上……ね」

「じゃあ、案内するよ」

シャルルは勘がいいのか、少し警戒体制になったようだが一夏は今だに普通のままだった。

「で、何を話そうとしたんだ？」

「僕も気になるよ」

「単刀直入に言おう。……シャルル、お前女だろ」

一瞬、二人の顔が引き攣る。

「どうやら、本当みたいだな」

「……それを知って、どうするつもり」

場合によっては、口封じの為に君を殺すよ。とでも言いたげな目で俺を睨んではいるが、まだ武器は出していなかった。

「別に、ただ確かめたかっただけさ。男が簡単に乗って良いようなもんじゃない、このISってのはな」

「え、そうなのか」

「ああ、多分一夏は束博士に選ばれたんだろうよ」

「ヴァンもか？」

「いや、俺はこいつ以外は全く動かせない。IS適性も『測定不能』だ」

「ラファールも打鉄も試してみたが、結果は同じ。この“イズムルト”だけが、俺を受け入れてくれていた。

「ならどうして君は乗れるのさ、実は君も女の子じゃないのかな」

「別に証明しても良いんだぜ、一夏を呼んだのもそのためだ」

「むづう……。分かった、信じる」

要らない想像までしたのか、シャルルの顔は少し朱かった。

「さて、今日の一時限目は実習だったよな」

部分展開させたISから情報を確認する、と共に時刻の確認。

「そろそろいかないとヤバいな」

「俺まだ着替えてねえよ」

普通は下に着ておくだろ。

「早く行くよ、二人とも」

全力疾走で更衣室経由でアリーナに向かったが、少し遅れてしまったので後に伝えられるであろう伝説の出席簿チョップを、早くも受けるはめになっていた。

「今日の授業は……そうだな、ヴァディム」

「はい」

「ISを展開してみる」

生徒から少し離れて、ISを展開する。

「あれ、ヴァンのISってなんか小さくないか」

「こつこつ設計なんだよ」

それもそのはず、この《イズムルート・フスプイシカ》最大の特徴は、等身大のアーマーを全身装甲の様になっている所だ。

だから、各身体のパーツ毎にピッタリフィットするよう生計された俺の専用機は、小さくなるのが普通なのだ。

機動力を高めるための、このやり過ぎ感がまた堪らなくいい。

「よし、じゃあ誰かヴァディムと模擬戦してみる」

「私がやりましてよ」

セシリア・オルコット。

イギリスの代表候補生で、専用機は“ブルー・ティアーズ”だっただけか。

「相手にとって、不足無し」

「なら、所定の位置につけ。生徒は観客席へ急いで移動しろ、5分後に開始する」

所定の位置までISでゆっくりめに飛んでから、最終チェックを行う。

大体各エネルギーはマックス近くまでチャージ済み、機体の反応も悪くない。

ちなみに、エネルギーは満タンにしない派だ。たくさんいれっぱ

なしってのはなんだか好きじゃない。

そんなこんなで、5分後。

『では、始めるぞ』

「いつでも」

『同じく、ですわ』

今回はカウントダウンは無しで、すぐに始めるのこと。

「覚悟はよろしくて？」

「……そんなことを言ってられるのも今の内だ」

「威勢だけは、褒めてさしあげましょう」

ムカつく奴だな、こいつ。

「時間も少ない、5分で決める」

「決められる、の間違いではなくて？」

ああやって高みにいられるのも、今の内……。力は使うべき時に使うべき形で使う、それが正しい使い方だ。

「一気にカタをつけますわ」

遠距離からの射撃攻撃、それが彼女の戦い方だった。あれだけの

装備を全発射しても“隙間”は必ず生まれる。

「……相手が悪かったよ、お嬢さん」

意識を一点に集中させる、そして瞬時に爆発させるイメージ。

全ては、一瞬だ。

「加速するぜ」

弾丸と弾丸の間をすり抜けて接近する、普通のISの様に無駄に幅広くないので、スイスイと進む。

既に弾丸のスピード、軌道、そして威力は大体把握済みだ。途中でツインダガーを用いて落とせる弾は落としていく。

「意外と、やりますわね」

射撃を取りやめ、ビット攻撃に移る。

「これなら……」

「だが無意味だ」

そのビット攻撃こそ、彼女最大の攻撃方にして最大の過ち。

普通ならその不規則な攻撃に悩まされるところだが、残念ながらビットでの攻撃中に棒立ちしている相手に俺が劣るのはありえない。

「マルチイグニッションブースト  
連続瞬時加速」

これを用いて、加速から攻撃を繰り返す。そうすることでビットを全てたたき落としてから……。

「終わりだ」

後ろから喉元に“ヴェーチェル”、そして背中に“リョートウ”を突き立ててそう呟く。

「降参するか？」

「……私の、負けですわ」

こうして、対候補生戦績は幸先がいいことに勝ち星となった。

## 第一話 翠玉の閃光（後書き）

どうも、@miaです。

いかがだったでしょうか。

面白いと思った人も、面白くないと思った人も、ここまで読んでもらってありがとうございます。

タグに関しては、今だとネタバレになってしまつのでまだ控えめです。

その内色々と開放されていくので、これからよろしくお願いします。

## 第二話 銀髪の少女

模擬戦を終え、ピットへと降り立つとドイツ代表候補生のラウラ・ボーデヴィツヒがいた。

「貴様がヴァディムか」

「ああ、そうだが」

冷淡な声や左眼にした眼帯が彼女がいかに強いかを語っているよ  
うな、そんな気がした。

「今の戦い方だが……中々に面白い」

「そりゃどうも」

「だが、機動力に頼る戦い方では私のシュヴァルツエア・レーゲンは倒せないぞ」

確かに、あのAICはかなりの強さを誇る。だがしかし、それ  
だって弱点がないわけではない。

「ああ、そこが問題なんだよな……」

ここはとりあえず、対策なしという対応をしておいた方が後々で  
戦った時に有利っぽいので、そうしておくかな。

「楽しみにしてるぞ」

颯爽とばかりに立ち去っていく彼女の後ろ姿を見つめながら、俺はしばらくその場を動けずにいた。

「……って、今は授業中じゃん」

胸によくわからない蟠りを残しながら、俺はアリーナへと向かった。

## 第二話

～銀髪の少女～

「ヴァン、お前こんなに速く動けるのか」

「まだ速く動けるけどな」

ちなみに、今回の戦闘に関して彼女は不服なようだった。まあ、それもそのはずだろう。イギリスの代表候補生たる者が僅か5分もかからない内に負けるなんて、誰が予想出来たか……まあ俺は勝つことしか頭に無かったがな。

「ヴァディムさん、今回は負けましたが次は負けませんわよ」

と言い残して、彼女は去っていった。……いかにも負け犬っぽい台詞だと思ったが、彼女のプライドのためにも少しばかり黙っておこうじゃないか。

それから時間は流れ、昼休憩に。

「学年別トーナメントねえ……」

「ん、まだ考えてたんだ」

昼食であるカレーライスを食べながら、俺はシャルルの言う通り  
思案中だった。

今日の実習が終わってからすぐに生徒に通達され、この昼休憩で  
はこの話題で持ち切りだった。というよりは、持ち切らざるを得  
ないと言った方が正しいのか。

「しかも、二人組ときた」

つまり、誰かとペアを組まなくてはならないそうなのだ。この学  
園で友人が極端に少ない（まだ転校初日だったのに色々ありすぎだ  
るおい）俺にとってはかなり痛い話である。

「そういえば、ヴァンは誰と組むんだろうか」

「さあ、僕は一夏と組むからなあ」

一夏はシャルルと組むらしいし、これは困ったな。今のところは、  
この二人しか友人がいないから……。リア充爆発しろって、今使  
って良いんだっけ？

そんなことを考えながら、食事をしていると。

「ねえねえ、日崎君はもう決まってるのかな」

「もしいなかったら、私と組んでくれないかな？」

「あ、抜け駆けはするいよ」

「いや、ちょっと皆落ち着こうぜ」

食堂にいた数人の女子に押しかけられて困っていたところ、そこに颯爽とある少女が現れて。

「私に決まっているだろう」

周囲のざわめきが一瞬にして止む、正にこれこそ嵐の前の静けさ。とても言えば良いのか、それをいいことにラウラは俺の方に近寄ってきた。

「異論は？」

「ない、というかこっちから願い出たいとこだな」

学年第一位の実力を誇るのはきつと彼女だろうし、その彼女から声がかかると言うことは俺の実力が少なからず認められているという事に繋がる。

それに、俺自身が間近で彼女の戦い方を見てみたかったってのもある。

「それなら問題ないな」

その会話を聞いて、さっきまで群がっていた女子郡は散らばってしまった。

少し待ってもラウラがもう何も言いなさそうだったので、再び昼食であるカレーライスに手を伸ばす。

「いやいやいや、ちょっと待ってよ二人とも」

「そんなに簡単にタッグ組んでもいいのかよ」

「簡単も何も……な」

「そうだな、ヴァデームの言う通りだ」

「自分が一番強いと思う奴と組む」

お、見事にハモったな。てか、俺ってラウラからそう思われてたんだ。嬉しいじゃないか。

「……この二人ならなんだか良いような気がする」

「一夏、同感だよ」

そして二人も昼食を再開する。

「あ、そうだ。ラウラ、放課後特訓用にアリーナの申請を……」

「既に終わっている、一七三 から第四アリーナだ」

「了解」

最初から俺を誘うつもりでここにきたようだったので、手間が省けたらしい。ちなみに、俺としても手間が省けたので良かった。

「ではな」

既に昼食は済ませていた様で、ラウラはくるりと踵を返して教室へと戻っていった。

その後ろ姿にまた見とれていることにまた気がついて、あわせてカレーを食べに戻る。

「ヴァデイルム君って……」

「ん、なんだ」

「もしかしくなくても、ラウラに惚れたでしょ」

「ん……、そうかもな」

確かにラウラに好意を寄せていることは認める、でも単純にそれだけじゃない気がするんだがな……。

「あまり否定しないんだね」

「まあ、彼女に会うのもここにきた一つの理由としてある。……勘違いしないでほしいが、これは専用機持ちの面々を見たかったと言う意味に過ぎないからな」

言い訳ともとれる言葉を濁しておきながら、またカレーに手を伸ばす。

「なるほど、なら後で白式とも模擬戦するか」

「僕のR・リヴァイヴ・カスタム？ともしてほしいな」

「なんなら、二人まとめてでもいいぜ。どうせ二人組のトーナメントなんだし」

「言ったね、後で後悔しても知らないよ」

「ここまで言われては引き下がれねえな」

「あ、やっぱり明日以降でもいいか？」

今日はラウラとの訓練に専念したい、というのもあるが単純に模擬戦を一日に何回もするもんじゃない。

とりあえず、そうやって濁しておきながら今日の昼を終える。

その日の放課後、指定された時間の10分前にアリーナに着くともうラウラはそこにいた。

「早いな」

「……ふん、お前が遅いだけだ」

「まあ、今日からよろしくお願いしますよ。教官」

「……私はそんなに大それた人間ではない」

瞬時に織斑先生を思い比べたのか、ラウラは少し肩を落とすような雰囲気だった。……こりゃ口が滑ったというレベルで済みそうぞ

はないな。

「スマン、ちょっとした冗談のつもりだったんだが」

「気にするな。いずれ私もそうなる身だ」

ラウラが教官か……。

それをイメージして、すぐにピンと来ることから多分ラウラにはその気質があるんだと思うし、そのための実力はまだまだ向上していくだろう。

「んじゃ、改めてよろしくな。ラウラ」

「ああ、「こちらこそ頼む」

握手を交わして、俺達のペアはここからスタートした。

「それじゃあ、まずはどうしようか」

「うむ、まずはお互いの機体のデータが必要だな」

そういつて、ISを部分展開させるラウラ。それに習って俺も部分展開する。

本来なら、全展開の方がいいがそうすると俺の目線が合わないの  
でそうしてもらった。

「それにしても、このAICってやっぱり脅威だな」

アクティブ・イナーシャル・キャンセラーのそれぞれの頭文字を取ったその能力は、感性停止能力でありロックした相手の動きを止めることが出来る。

ラウラ自身は、この能力のことを停止結界とかなんとか言っていたが、ズバリのを得た表現である。

かなり高性能な感じだが、弱点がないわけではない……。今はまだ見つけられないが。

「機動力ではお前の方が上だ。だが、これでは遠距離戦闘はほぼ苦しいな」

「基本的にはこの近接戦闘が、イズムルートを持ち味なんだがな」

「あらゆる場面を想定して、戦い方を考慮しないとダメだぞ」

「なるほど、だからラウラのISは万能型なんだな」

「当たり前だ」

「とりあえず、作戦と言っても一対一に持ち込む戦い方が一番手っ取り早いと思う」

「それができれば問題はないが、敵も基本は連携をとってくるだろう」

「なら、こつちも連携とってみるか？」

「そうだな……お前のその機動力を私の攻撃力に転化、あるいは私

の停止結界をお前の攻撃力に転化する」

「具体的には？」

「前者はお前が私を武器ごとの適性位置まで高速で運び、そこから攻撃を打ち込む訳だ。後者は私が停止結界を用いて敵を止めている間に、お前が攻撃を打ち込む」

どちらにしる口にしてしまえば単純なんだが。

「前者の場合は、俺とラウラのタイムラグが発生する可能性。後者に至っては、俺がAICに巻き込まれないかが心配だ」

「前者は地点に達したら勝手に降りる。私はその程度のタイムラグを測定出来ないけども？」

「後者の場合は？」

「お前が攻撃するときだけ、停止結界を一時的に解く。なるべく相手が動く暇なき連続攻撃を与えてほしい」

「了解、わかりやすい説明だった」

こうして、俺とラウラは簡単な作戦会議を終えて特訓に入ることにした。

## 第二話 銀髪の少女（後書き）

予定より早めに第二話を投下してみましたかどうでしょうか？

今回はちょっと内容を濃くしてみたつもりでしたが、はたして伝わったでしょうか……。

さてさて、とりあえずは次の話の予告的な感じになると思っています。

今回の前半部分は大体この特訓とかについてなんですけど、後半からこの作品のタイトルでもあった伏字の部分について書こうと思案中です。

このまま伏字のままにしておいても良かったのですが、やっぱり隠したままと言うのは居心地が悪いので。

なぜ、【イズムルート】が彼を選んだのか。  
気づいている人があまりいないことを祈りつつ。（面白みが半減してしまいそうですので主に私の）

それでは、また週末（予定）にでも。

### 第三話 誕生石のコア

「とりあえず、軽く準備運動がてらに軽くやるか」

「ん、そうだな。ラウラのAICのタイミングとかも知りたいし」

模擬戦、というよりかは武術などに使われる約束組手に近い戦闘。俺のISに合わせて、近接限定の組手は妙に楽しくもあった。だが忘れてはいけない、これが人殺しの兵器になりうることを……。

「どうかしたか、ヴァディム」

「ん、少し考え事をな」

約束組手とはいえ、戦闘中に余計な考えを持つとは我ながら情けない。

今は集中して、ラウラに向き合わないと彼女に失礼だ。過去なんて振り返っている場合ではない、振り返る必要もない。

### 第三話

#### 〈誕生石のコア〉

ラウラと特訓を始めて早三十分も経っている、大体俺の速度を攻撃転換するのは把握出来たようで（戦闘においてのラウラの適応能力は半端ではない）次はラウラが一度AICを用いて敵の動きを止めて、そこに攻撃を打ち込む方の練習なのだ。

「また失敗……か」

「済まない、ラウラ。タイミングがどうも掴めなくて」

特訓方法は至ってシンプル極まりないので、ラウラが空中に放り投げた空のマガジンをAICで停止させ、それに向かって俺は加速。その後、タイミングを合わせてラウラがAICを切断することで、俺はAICの効果を受けないまま攻撃を加えることが出来る。

……と言っわけなんだが、いかんせん上手くいかない。

まず、瞬時加速が使えないのは痛かった。自分の身を案じるためでもあるが、スピードがイマイチ乗らないのでタイミングがズレる。

「まさか、初速度の向上のために加速する時に一度瞬時加速しているとは」

「といつても、三メートルあれば十分なんだが……」

今回はその課題もついでに乗り越えよう、というラウラの提案で瞬時加速は使わないことになっている。

そして、二つ目はなににより目標が小さいんだよこれが。

空のマガジンつつても、IS用ではなく通常武器の方を用いている（理由は学園内にいらぬのが多数あったからだそうだ、いつ調達したかはあえて聞かないでおいたが）ので、当てづらい。

「こつ、居合とか使えないのか？」

「……それだ！」

「ん？」

全く懸念してなかった。

そうだよ、居合を使えば良いんだ。基本的にツインダガーばかり使ってるから、日本刀の装備のことを忘れていたよ。

てか、イズムルートの初期搭載武器だった……。

「日本人である父さんに感謝しないとな」

ツインダガーを一度戻して、日本刀“翡翠”を展開させる。

「ふうむ、良く出来ているじゃないか」

日にさらしてその輝きを見ている、心が洗われるような感覚……。

このままでは居合は不可能なので、鞘も展開しておく。というかまあ居合なんてやったことがないからうまくいくかどうかなんてわからないが、とりあえずやってみよう。

「いいぞ、ラウラ」

さっきまでの一連の流れで空のマガジンが放り投げられ、それが途中で止まる。その止まった瞬間を見計らって、踏み込む。

一歩目は半歩程度に留めて、体制を整える。前傾姿勢にしつつ二歩目は大きく踏み出して、そこからスラスターを用いて加速する。

居合の極意はよく分からないが、とりあえずイメージだけを浮かべる。目標を定め、刀に手をかけ、一気に引き抜く。

先ほどはなかった手応え、確かにマガジンに攻撃を当てることが出来たのだが。

「まだまだこれでは使い物にならない」

マガジンは不揃いな形で割れていた。中心（多少の誤差はあれども）を捕らえて斬らないと、ラウラの合格ではないみたいだ。

「でも、これで感覚は掴めたはず。もう一度頼む」

今日の特訓時間ギリギリまでこれが続けたが、成果は少なく合格を貰える所か今だに攻撃が当たる確率も三回に一回程度だった。

一日で身につく技術でないことは覚悟していたが、こつも上手くいかないのは少し気が滅入ってしまうが、新しいことに挑戦する時は大体こうだ。

と、自分自身に言い聞かせて今日のところは解散することになった。んで着替えをちゃちゃっと済ませ、寮に戻る途中……。

俺はとあることに気がついた。

「俺の部屋ってどこだよ」

大体放課後までに教えてほしいものなのだが、まあとりあえず夕食時なのでそれを食べてから山田先生でも織斑先生でも探すとしよう。

一夏とシャルルはもう夕食に向かったらしく、どこにもいない。ラウラはラウラで何か用事があるって言ってたので、現在は一人淋しく夕食に向かわなければならぬ状況下に置かれている。

「おい、日崎」

後ろから声がしたので振り返ってみれば、織斑先生がそこにいた。

「何でしょうか」

「ちょっとこい、大事な話だ」

こっちとしても、部屋割のことについて色々と聞きたかったから丁度良かった。

織斑先生に肯定の意思を伝えると、何も言わずに歩いていくので慌ててついていく。

歩いて5分くらいだろうか、俺は自分のクラスにいた。当然、そろそろ夕食の時間なので誰も教室にいるわけがなく俺は織斑先生と一対一で対話する形になった。

「それで、用件はなんですか」

「なに、簡単なことだ……」

コンマ何秒かの間に、俺は織斑先生に後ろ手を取られていた。

「そのIS……BSISか、それをどこで手に入れた」

「ちよつ、先生。離して下さいよ」

「それは無理だ。そんなことより、私の質問に答えろ」

「答えるも何も、貴女は知ってるはずですよ」

BSIS、その単語の意味を先生が知っているのならばこの質問は無意味だ。

「東博士にしかISのコアは作れない……これが答えです」

「何を言うかと思えば、そんな洞を吹くか」

「賢い貴女なら分かるはずですよ、博士の性格上……ね」

「生憎、私は分からないな」

「妹思いな博士なら、と言った方がいいでしょうか」

「……」

「貴女が気づいていないはずがない、俺がBSISに乗っていることが意味することを、もう針は動き出していることを……」

「黙れ……」

その声はとても低く、女性だとは思えない程の威圧感。それを放つだけの理由が、この件にはあった。

BSIS……、正式名称は【バース・ストーン・インフィニット・ストラトス】といい、誕生石のコアを用いて作られた十二機のISのことを指す。

東博士が一番最後に作ったコアで、ISのスペックを最大限に引き出すことができるコア。それが誕生石のコア。

だがしかし、そのコアで作られたISには自己意識が生まれるらしく、操縦者を“ISが選ぶ”形になる。

つまるところ、最大限引き出したISのスペックを最大増幅できる人材が選ばれる。そこに善悪の意識は関係ないので、誕生石のコアに選ばれた人間は正に神に近い人間ともいえる。

さらに、BSISは東博士による支配下から逃れるのでそれに乗って好き勝手に行動することが可能になる。

今は力をセーブしている（というよりかはまだ試作段階で全力を出せないだけだが）イズムルートも、膨大な能力を秘めている。

「分かってます、これを扱うことが何を意味するかなんて」

いずれ戦争に巻き込まれる可能性だって少なくはない。今は条約が結ばれているから良いものの、この条約が意味を成さなくなつた時点で俺はロシア軍に所属されるだろう。

いくらIS学園が無国籍学園だからといっても、条約が破棄され

た時点できつとこの学園も壊滅される。多分、ではなくて絶対に。

「……分かってなんかいない、ISを用いた戦争なんてものがどれ程までに残酷かが」

「確かにBSISは戦争の起爆機になりえます。しかし、抑止力にもなりますよ」

かつて各国がごぞつて核兵器を保持していたのと同じ様に、人は起爆材になりうる抑止力を求めている。

「それに、イズムルートが俺を選んだ」

別に乗ることを義務づけられてる訳じゃないけれども、俺にはやらなきゃいけないことがある。

「俺はイズムルートと共に歩むことを決めた、そして姉さんを倒さなければならぬ。……貴女がISを用いた戦争に関して否定的なのは知っている、博士がよく言っていたから」

「……」

「博士だつて、今自分が作った機体の制御が出来ないことが辛いはずだ。だけれども、そこで手を休める訳にはいかない」

博士がしてくれたことに対する感謝の念も込めて、俺はこのイズムルートと共にある。ISで変わった自分の運命を受け入れ、そしてISで終止符フィナーレを打つためにも、イズムルートは必要だから。

「そして、一夏が使っているIS“白式”……これはBSISとは

また別だけれども、起爆材でもある抑止力の一つ」

簡単に言えば、対B S I S用I Sとでも言えるだろう。対B S I Sどころか、全I Sに対しての抑止力にもなりうる程にあのI Sの力は大きい。

「貴女が知らないはずがない」

と、もう一度だけ言ってから後ろ手に捕まれていた体制を一瞬で解く。

「っ……」

「今の貴女なら、あの一夏でも勝てますよ」

それ程に彼女はI Sを、そしてたった一人弟を大切に想っている。束博士のことだって多少は心配しているはずだ。

それに、彼女はもうI Sからは離れられない。

「もう一つ、多分知らないでしょうから言うておきますけど。束博士の妹さんが七月のコアから選ばれました」

それを聞いて、さらに瞳孔を開いてこっちを見てくるが、彼女に選択の余地はないし、尚且つ立ち止まることすらもう許されない。

過去の栄光だけでは、この先は意味がない。

### 第三話 誕生石のコア（後書き）

いかがだったでしょうか。

自分としては説明口調で今回は進めていたんですが、少々重苦しかったかもしれませんね。まあ、意図的にそうしたわけですが。

そして千冬姉ファンの方々には謝っておきます。  
なんか全然らしくないかんじにしてしまいました。

まあ、色々と原作ブレイクしていくと思えますがなるべく温かい目で見てもらえると嬉しいですよ。

#### 第四話　＼ISという力＼

イズムルート・フスプイシカ……。

表面上では500もないISの一つ、そしてそれらのISより高いスペックを持ちながらもまだまだ成長の幅が半端じゃないくらいあるという。

イズムルートは速さを欲している、それがなぜなのかは分からない。でもイズムルートは他のタイプは受け入れなかったらしい、そして俺以外を選ばない。

なあ、イズムルート。

お前は何故俺を選んだ……いや、多分選ばれる運命だったとしか言いようがないのかもしれない。

#### 第四話

＼ISという力＼

そろそろ夕食時というころ、俺はさっきの曇った気持ちを晴らすと、俺は食堂に向かった。

「あ、日崎君。丁度いいところ」

「山田先生」

「こちらに部屋割の紙があります、それに従って自分の部屋に行ってください」

渡された紙を見ると、どうやら二人部屋を一人で使ってオツケらしい。事前に荷物は送っていたので、整理は結構楽だと思う。

「荷物運ぶの大変だったそうですよ」

「うっ……すみません」

「まあ、IS使いましたけどね」

いや、そんなに重くないはずだし……。てかそんなことでISを使うなよ、おい。

「とりあえず、夕食食べてから荷物の整理します」

「よろしくお願いしますよ」

山田先生と別れて、食堂に向かう。今日の夕食は何カレーにしようか迷っていると、後ろから声をかけられた。

「よお、ヴァン。今から夕飯か？」

シャルルと訓練を終えた後そのまま来たんだろう、二人で来ていた。

「そうだ、今晩は何カレーを食べようかなって思ってたな」

「昼もカレーじゃなかったっけ？」

「そうだが、何か問題でも？」

昼と夜じゃ食べる種類が違うから、俺的にはノーカンだ。朝は毎朝日本人的朝食を食べてるし……。別に問題ないだろ？

「いや、問題というか……な」

「うん……ね」

「二人して何をアイコンタクトとってるんだよ。まあ、二人も一緒に食べようぜ」

食券を買って（ちなみにグリーンカレーにした）おばちゃんから商品を受け取り、空いている席を探す。

「うーん、中々見つからないな」

「ちょっと待ってて……よし」

シャルルが何かを決意したように、とある席に向かっていきそこで数回の対話を交わした後でこっちにこい、的アピールをしたので一夏と共にそっちに向かうと数人の女子と相席することになった。

「うわあ、織斑君とデュノア君と夕食なんて夢みたい」

「じゅめんね、急に頼み込んで」

「い、いやいやいや。こんな幸福なんてないですよ」

「ありがとな」

なんか、俺疎外感？

「えっと……もしかして俺って邪魔？」

「ううん、別に」

とりあえずは良かった……。

「あまり気にかけてないから」

前言撤回。

やっぱり俺って邪魔じゃん、この転校初日の疎外感がいつまで続くかな……。うん、頑張ろう俺。

その後も、色々と疎外感を感じながら夕食を黙々と食べて、とつとと去ることにした。

一夏やシャルルが制止するが、部屋の片付けも残ってるのでという理由で先に帰った。

早足で自分の部屋に向かったので思ったよりかは着くのが早かった。とりあえず部屋割の紙と同時にもらった鍵を用いて、部屋のドアを開ける。

部屋の中に入って、電灯を点けてから辺りを見渡す。

ISを使う程に大きな荷物は持ってきたつもりは無かったので、少し違和感があった。

部屋のだ真ん中に鎮座されている、馬鹿デカイ段ボール箱……。

隣に置いてある自分が持ってきた段ボール（引越しの時に用いるくらいの大きさ一つ）の数倍はある。てか、絶対一人入るよこれ……。

「もしかして、東博士ですか？」

「んや、当てられちゃったねえ。じゃあ用件を……」

「イズムルートは渡さない」

「ありや、わかった？」

「当たり前でしょ、貴女のポリシーは俺だって知ってる」

彼女は完璧にして十全な篠ノ之東である、すなわち作るものも完璧において十全でなければ意味がない……。

彼女にとってこのBSISは欠陥品である、だが俺にとっちゃ唯  
一なもんでね。

「貴女が完全なる完璧を心情「ソフトウェア・オブジェクト」にしているのは知っています、しかし……

……

「ちよっちタイム、君は何か勘違いしてるよ」

「え？」

「これこれ、じゃーん」

彼女は段ボールの中から飛びでて、さっきまで自分が踏み台にしていた箱を取り出そうとする……が。

「ふにに……、お、重い」

「いや、手伝いますよ」

イズムルートを部分展開させて、段ボール内から器用にブツを取り出す。

「これ、なんか異様に重いんですけど……」

「まあ、全部マトリョーシカ的な感じの多重ロックなんだけどね」

彼女がそこまでしなければならぬ理由があるものが、この中にはある。と、少し考えている間にも既に解除が終わっていた。

「さあさあ、中身をご覧ください」

中には二つの拳銃、そしてチップが一枚入っていた。

「これは……？」

「見ての通り二丁拳銃シンバレット、その名は“灰色の嵐”スィーティルイー・ブーリャ」

名は体を表す、とはよく言われるがこの二丁拳銃は正に灰色だっ

た。IS用、というかイズムルート用で少しサイズが大きいし重い。「君のには遠距離系武器が無かったから、特別サービス……」と言いたいところだけど」

「今回の目的は別、ですか」

「そうだねえ、本来の目的はこっち」

そういって、チップを取り出して微笑む彼女。

多分、イズムルートに関わる何か。……まあ、どんなときでも俺には選択肢がないわけだが。

「……仕方ないですね、はい」

右腕を展開して、彼女に差し出す。待ってましたとばかりに何本かの線が繋がって、操作が始まるが……すぐに終わる。

「終わったよん」

「一体何をしたんです？」

「パススロット拡張領域の拡大とそして イズムルートこの子が フォレスト形態移行するために必要な素材を、ね」

詳しい説明によると、拡大した拡張領域に灰色の嵐を追加してその残りの領域に形態移行した時に武器が生成できるようにデータを改ざんしたらしい。

データ上では、灰色の嵐が領域のほとんどを占めていることになるが実際はイズムルートが更に強化されていくため……。いや、もっと完全にして完璧なISを完成させるために。

それが彼女の欲望であって、俺が姉さんを倒すためには必要な力。

「イズムルート、調子はどうだ？」

もちろん答えしてくれるわけがないし、俺だって答えを期待したわけじゃない。何というか、もう癖になった感じである。

「ちなみに、灰色の嵐はわざわざ部分展開せずとも携帯できるよ。重さ《ウエイト》の調整は自分でしてくれなきゃ」

「いや、別に俺はこんな物騒な物を携帯する気はないで……」

「これからの時代がどういうものかわかってるかな？」

……。

言葉も出なかった。

その言葉には、別の意味がこめられているような気がしてならなくくて。

俺は、ずしりとくるとても重い拳銃を手に取る。

この重さと天秤にかける人の重さは、計り知れないものと同じながら。

## 第四話 くISという力（後書き）

いえ〜い、第四話目だ〜。

前回よりまた重い話になってしまいました。

えっと、まあでもこれが@m i a仕様ってことで勘弁してください。

こんな感じでどんどん突き進んでいきますが、どうぞよろしくお願  
いします。

## 第五話 忘却の彼方

IS学園の地下にある射撃訓練所に俺はいた。勿論、さっき受けとった拳銃の試し撃ちをしにきた。

博士は用件が済んだ瞬間にどこかへ脱兎のごとく逃走していったので、詳しいことはあまり聞けなかった。尤も、まだ博士にも策略を気づかれてはいないだろう……。

いや、あの人のことだ。気がつかないふりをしているという可能性もないわけではないだろうし、俺にこれを渡したということはそう遠くない未来で……。

「今はやめとこうか」

あんまりふさぎ込んだ考えばかりでは、気分も悪くなる。常に最悪の事態を頭にいれておくことは重要だが、それでネガティブになるのは本末転倒だ。

とりあえずは、拳銃の使い方だが……。

「拳銃なんて、久しぶりにもつな」

あの時は、自分がまさかISを扱えるなんて思ってもいなかったし、護身用くらいのレベルでしか拳銃は使えないはずなんだが。

まずは一つ手にとり、十数メートル先の標準を定めて何発か撃ってみる。

確かに、反動は凄いが無視できるレベル。知らぬ間に筋力でもつけたのかもしれないが、今はとりあえず無心で撃ちたかった。

両手で支えて一マガジン（八発）を撃ちきったところでリロード、そして今度は右手で片手撃ち。さっきより狙いは少しずつれるが、それでもなんとか撃てる。

また一マガジン撃ちきってからリロードして、今度は左に。それが終わったなら二丁の拳銃を左右に持ち、交互に撃つ。

相変わらず反動は来るが、それよりも一心不乱に撃ちまくる。

途中で、重さの調節に使われていた鉛を調節しながら自分にあった武器にしていく。

用意したマガジンを全て使い切ったところには、もう既に感覚を取り戻したどころか、以前より俄然撃ち易くなっている自分がいた。

「この感覚、か……」

忘れていた感覚、というよりかは抜けていた感覚と言った方が正しいだろうか。それほどの違和感を胸に、俺は自室へと戻った。

## 第五話

（忘却の彼方）

あくる日、俺が朝食（朝定食セット＋ミニカレー）を食べていると、ラウラが近寄ってきて。

「今日も昨日と同刻同場所にこい」

「了解。ラウラはもう朝食食べたのか？」

「今からだ」

「じゃあ、待ってるからこっち来いよ」

「分かった」

ラウラが朝食（パンとコーンスープにチキンサラダ）を持ってきたのを確認して、食べるのを再開する。

「そういえば……お前、私と以前にあったことはなかったか？」

「は？」

俺の記憶上ではラウラとあったことなんか無いし、勿論ドイツにもいったことがない。

「いや、多分人違いだろう」

「自己完結できたなら何よりさ」

ぼそっと、ラウラはこう言った。

「……あいつの瞳は紅かったからな」

「何か言ったか？」

あえて聞こえてないふりをしたが、聞こえないはずがなかった。だが、紅色か……。

ラウラは色々と勘が鋭いことがある、多分昔の俺も少しながら覚えてはいるはずだ。だが、まだ今思い出してもらうわけにはいかない。

「そつえば、朝からしつかりと食べるんだな」

どうやって話をすり替えようか迷っていると、ラウラから話を變えてきた。

「ん？ まあ今日はちょっと腹が減ってたからな」

昨日の晩の射撃練習が結構きてるみたいで、いつもより少し多めの朝食だった。

「朝にエネルギーを十分補給しておくのはいいことだ」

逆に夜沢山食べるのはあまりよくないらしい、というのもちやんと理由があつて。なんでも、あまり身体の活動がない夜に沢山食べてもそれは全部脂肪分に回ってしまうかららしい、脂肪がつくと身体のキレに問題が発生して自分の力を十分に発揮できないそうだ。

脂肪分つてのは、いわば身体の中にある重りみたいなものであるからその理論は正しいと言える。

「常識だ」

と、少し誇らしげにパンをかじるラウラ。

「そうかい」

「ふん……」

それからは俺もラウラも朝食を黙々ととった。

時は流れて授業に。

「今日の実習は武器の特性についてだ。デュノア」

「はい」

「今からターゲットを出す、それをアサルトライフルを用いて撃ち抜け」

ルールは至極単純で、呼び出されたターゲット（今回は500枚）を三分間でどれだけ破壊することができるか、というものでターゲット一枚一枚に得点が違うので高い得点のものを優先的に破壊することが優先される。

「分かりました」

話を聞いてすぐにISを展開し、すぐにアサルトライフルを構える。

シャルル・デュノア……。世界でISが使える男子、ではなく実は女子でその実態には別段興味ない。

使用ISはR・リヴァイヴ・カスタム？。以前から汎用性に優れ

ていたラファールの拡張領域パススロットを増やして、様々な武器を色々入れてるので様々な戦局に対応できるらしい。

実際問題、逆にやるが多すぎて俺には向かない戦い方である。

「終わりました」

俺が色々と考えている間に、既にターゲットは全て撃ち抜かれていた。

スコアは10352点、量産機の平均が大体5000台、代表候補生の平均は大体8000台なのでかなり高いと言える。

「ふむ、まあいいじゃないか。セシリア、日崎お前達もだ」

「了解ですわ」

「分かりました」

イズムルートを展開、そして二丁拳銃を構える。

「全部含めて約一秒……もう少し早く展開しろ」

それでも早い方だと思うのだがな、二丁拳銃は昨日きたばかりなんだし。

「オルコット、銃口をどこに向けている」

「これはイメージしやすいように……」

「言い訳は無用だ、直せ」

さすがのセシリアもこの気迫には勝てないようで、しゅんとしながらも素直に従うようだった。

「お前達にも同様のことをしてもらおう、まずはオルコットからだ」

傲慢でもある射撃の腕の見せ所なので、セシリアは張り切っていた。

「フランスの第二世代には負けませんことよ」

「昨日の試合をみたところ、射撃に関しては僕の方が上だと思うな」

俺としては後がつかえてるので早くしてほしい、それがお互いのためだ……。

「いつまで待たせる気だ」

織斑先生の制裁が下ったため、英仏の睨み合いは終わったがセシリアの方はまだ勝つ気でいるみたいだ。

「では……いきます」

セシリアは六つのビットを操作して、ターゲットを破壊していく。

「てか、ビット操作なんてよく出来るよな」

「一夏、あれ多分セミオートだ」

ビットの動きをよく見ると、停止と放射のタイミングが少し違う。移動はマニュアルだが、攻撃は秒単位のオートだろう。

まあ、そうだとしても六つのビットをしかも射撃間隔を考慮した上で動かすとは……。代表候補生の名は伊達じゃなかったと言ったところか。

「終わりましたわ」

スコアは9875点、平均は軽く越えたもののシャルルには程遠い。

「ほらね、やっぱり僕の勝ちだ」

「だが、まだ俺が残ってるぜ」

そう言って、拳銃とツインダガーを取り出す。

「俺は少し武術を嗜んでいてな、その延長線上として軍の訓練も受けてたんだ」

「一体なにを言ってますの？」

「まあ、見てなって」

動かない無機質的な相手に、時間はとらない。

「全ては、一瞬だ」

アシン  
ドゥラヴァ  
トウリー  
「一つ、二つ、三つ……」。

心の中で呟いて、力を覚醒させる。力の流れが変わったことがある、自分の身体が自分のものじゃないみたいな、そんな感覚……。

「では……、始め！」

開始と同日に、ツインダガーの出力を最大にして自分は超速回転を行う。更にツインダガーを脇に挟んで二丁拳銃でこぼれたターゲットを狙い撃つ。

その間、僅か三秒……。

「終わりました」

力の流れをまた元に戻して、気分を整える。

「嘘……でしょ？」

「私達の二倍以上の得点を、あんな一瞬で……」

代表候補生どころか、この場に居合わせたほぼ全ての人間を震撼させてしまっていた。ちょっと本気を出しすぎてしまったようだった。

カラーコンタクトがずれていないかを確認してから、イズムルトを収納する。

「すげえよ、ヴァン。こんなこともできるのかよ」

「まあな、母さんの形見で不甲斐ないところは見せるわけにはいか

ないだろ」

……だとしても、反応が良すぎる。ハイパーセンサーも感度が抜群、回転に用いたエネルギーとツインダガーに用いたエネルギーの総和も以前より減っている。

昨日はそんなことなかったので、やはり東博士が拡張領域やその他うんぬんかんぬん言っていた時『ついで』に色々と弄ったんだろ  
う。

多分、他の機能も以前より強化されているに違いないだろう。あの人がしそうなことだし、俺としては願ったり叶ったりだ。

「こりゃ、ヴァンとは戦わない方がよさそうだな」

「……戦場に行けば嫌でも戦わなきゃいけない時がくる」

「え？」

「いや、なんでもない」

さっき一夏に言ったことを、自分に言い聞かせるべく復唱しながら、俺はいつかくるはずの戦争に嫌悪感を感じていた……。

## 第五話 忘却の彼方（後書き）

いかがだったでしょうか。

今回は複線だらけの話とってもらってもいいくらい、色々残しました。

これからまた回収をどうやっていくのか、まだまだ考慮中なんですけどね。

## 第六話 音速の先にあるもの

全ては、一瞬だ。

なんてことはない、時間はいつだって細やかな点の連続……。ゲームとかであるセーブポイントとかの概念となんら変わりはないと思うが、当然ながら実際に時間は遡れない。

だからこそ、一瞬なのだ。

俺が俺であるために一番必要な感覚とも言えるそれは、俺が抱えていた重みをさらに思い知らすこととなる。

おかえり。

忘れていた感覚……いや、一度完全に失った感覚。失うことを望んだ感覚。

ただいま。

忘れていた記憶、忘れようとしていた記憶、思い出したくない記憶……その全て。

今も昔も、あの日あの時あの場所で変わらざるをえなかった俺の人生。いや、結局のところはそれがなかったとしてもこの先にある運命は避けられるはずがない。ただ、俺が関わるかどうかの相違点しかない……それだけだ。

## 第六話

「音速の先にあるもの」

少し集中出来てなかった授業も、その後のHRも終わって放課後。現在はラウラと訓練するべく、アリーナに向かっている。

「おっ、ヴァムーだ」

「えっと……あ、のほほんさん」

一夏がそう言っていたのを思い出し、口にする。

「ん、おりむーと同じ呼び方なんだね。まあいいけれど」

「何か用件があるのか？」

「えっと、生徒会長さんから文を預かってまいりました」

と、袖で隠れていた手から封筒を渡される。……どっから出てくるんだよ、おい。

色々とツツコミ所は満載だったが、こういうのはあまり気にしないに限る。それに、封筒の中身も気になるし。

そして封筒を開けると、中には一通の手紙が。……ああ、文って手紙のことを指してたのか。こういう風に、たまにわからない日本語があるから困る。

とりあえずは、手紙を読んでもらうことにしよう。

『夕食前 に来て』

……どこに行けばいいんだよ、おい。

気がつけばのほほんさんはいないし、さらに俺は彼女の連絡先も知らない。

「……困った」

とりあえずヒントがないかどうか、封筒の中を調べてみるが何もない。手紙の裏にもないもないし、シャーペンなどで傷つけた様子もない……が、一つだけ分かった。

仄かな柑橘系の匂い、するところつまりあぶり出しだろう。戦場においてもたまに使われる文通手段としてあり、運のいいことにあぶり出しを上手にするコツも習ってたりする。

が、やっぱり一つ疑念が晴れない。

秘匿情報としてあぶり出しを選んだのは容易に想像ができるが、わざわざ秘匿情報にする必要がある？

「お、ヴァンじゃないか」

思案していて突然後ろから声をかけられたもんで、我ながらビツクリしたが平然を装って一夏のほうに向く。勿論、封筒は既に征服の内ポケットの中に収めていて抜かりはない。

「今から特訓か」

「ああ、やっぱりパートナーであるシャルルに迷惑はかけられないしな」

一日二日ですぐにかなるほど、ISは甘くないがそれでも一緒にいる時間が長ければ長い程、ISは応えてくれる。

「精々俺達とあたるまで負けないようにな、とだけ言っておこつ」

「なんでそんなに自信があるんだよ」

「そりゃ、パートナーがラウラだから……」

って、なんで俺はこんなにラウラを信頼しているんだ？

それに、久しぶりに開放したあの力……。もしかしたら俺は思い出しすぎてるのかもしれない、あの日のことを、あの戦争のことを……。

「どうしたんだ？」

「いや、なんでもない」

考えすぎだ。そう考えることにして、今は特訓に向けてしっかりしとかないとラウラに申し訳ない。あろうことか信頼されてるんだ、俺は。その信頼を裏切るといふ行為自体最悪なことだし、それをしないようにも日々頑張ってきてるんじゃないか。

「行くぞ、一夏」

「お、おう」

一夏と一緒にアリーナに行くと、既にラウラとシャルルがそこにいた。

「……何故ソイツがいる」

「いや、途中であっただけだ。それに今は戦場ではない、その気を立てるな」

「そんなことを私がするわけがないだろうが、だが常に最悪の状況を予想しておくことは悪いことではない」

「今から気にかけてすぎだ」

「備えあれば憂いなし、という諺がこの日本にはあるだろうか？」

確かにそうだが。

「やっぱり、日崎君とボーデヴィットさんはお似合いだね」

なんてことを言ってくれる、シャルルよ。

「俺も思うよ、ヴァン」

一夏までっ？

「ふん、勝手に言っているがいい」

「どこに行くんだよ、ラウラ」

ぶいっと外を向きながら、頬を少し赤らめてスタスタと歩き始めたので慌てて後ろを追いかける。一応一夏とシャルルに別れを告げているから、だが。

「おい、何でそんなにはぶててるんだよ」

「別に……はぶててなどいない、ホラ、今から訓練するぞ」

先ほどまでの雰囲気とは打って変わって、凜とした表情でISを展開するラウラ。この戦闘に向けるラウラの気合は凄まじいものだ、いやはや素晴らしい。

「じゃ、行くか」

イズムルートを展開して、レーゲンの前に立つ。

「今日は軽い戦闘だ」

まわりの生徒たちをあえて残すことで、障害物と考えるみたいだ。軍の訓練でもちよいちよいやってきたので問題はないし、それにこれからのトーナメントでも活かせることがあるだろう。いつも基本的には一対一か一対多、しかも自分以外に味方が完全にいない状態を考慮してイズムルートに乗ってたからな。

この間の瞬間回転攻撃も、完全なる一対多を見越して組み立てたものなので今回他味方がいる状態では無理だ。

「じゃあ、始めようか」

スィー・イー・ルー・イー・ブー・リヤ

灰色の嵐を展開して、ラウラを迎撃しつつ距離をとる。ラウラの A I C に対抗するべく、俺は常に移動している。

A I C の弱点として、完全なロックオンができていないという意味がない。つまり動きを読み取られないようランダムに動く必要性があり、それをラウラに対して行うのは至難の業であるのは間違いないが、まだ距離がある分俺も何とかいけている。

そしてそれをするために集中力も必要だし、A I C は多数の攻撃には不向きだ。

「そろそろ加速する」

マルチ・イグニッション・ブー・スト

連続瞬時加速を用いてランダムな直線運動で動きつつ、距離を詰めながらも射撃を続ける。リロードのタイミングを考えつつ威嚇射撃しているので、A I C に阻まれることもない。

「よく考えたものだ、だが……」

動きを変えようとして、連続瞬時加速の切替を行おうとしている時にタイミングを合わされてワイヤーで左脚を絡みとられる。

「甘いぜラウラ」

俺は灰色の嵐を収納し、ツインダガーを展開する。その片方にエネルギーを集中させてその刃を伸ばしてラウラに向け、もう一つのほうはワイヤーを切るのに使う。

「甘いのは貴様だ」

伸ばしたエネルギー刃はAICによって阻まれ、さらにワイヤーを器用に動かしてツインダガーを落としてつつ、イズムルートの全身を絡めとる。

ワイヤーに絡まれ、さらにAICにも動きを封じられる。だが、これも予想通り。

「残念だが終わりだ」

「試合はまだ終わってないぜ」

落とされたツインダガーの出力を、最大限まで引き伸ばす。

「なんだとっ」

ラウラのAICが解けた一瞬を狙って、俺はスラスタ―全てを用いた本気の瞬時加速を行う。それによりイズムルートは一気に最高速度まで加速、さらにその際に自らに回転を加えることでワイヤーを引き千切る。

その加速をさらに強める、それによりイズムルートは限界を感じてか警告音を鳴らす<sup>アラーム</sup>が、これ以降の戦いでも音速を超えられないよ<sup>マッハ</sup>うじゃまだまだだ。だからまだ頑張ってくれ、イズムルート。お前は伊達に閃光の名を名乗ってるわけじゃないだろ、音速くらい超えられないでどうする。

その思いに応えたのか、警告音が聞こえなくなる。音速を超えた先にあるもの、無音の空間。何もかもが止まって見えその中を自分が飛んでいる感覚。

そうだよ、これだ。

俺が求める景色、俺が求める感覚。

何もかもが彼らにとっては一瞬の出来事、俺にとってもこの景色は一瞬のものでしかない、だがこの一瞬さえつかめれば……。俺は負けない。

この景色が終わる前に、全てを終わらせる。そう感じて瞬時に翡翠を展開させる、攻撃態勢に入る。

そう、全ては、一瞬だ。

「リジウム・ラスー  
音速居合」

今まで加速してきた力学的エネルギーを全て一撃に繋げた攻撃、速度を増すごとに威力を増す。音速を超えた攻撃は言つまでもなくシールドエネルギーをこつそりと持っていく。

スラスターを逆方向に噴射することで停止し、ラウラの方を伺う。

「完全に捕らえたと思つたんだが……甘いのは私だったようだ」

「いや、俺もあれは博打だったから」

それにしても、今のはなんだつたんだろうか。

博士がイズムルートを弄つたと分かつてから、スペックの確認はした。だが最高速度は音速を超えてはいなかった、精々以前の二割

増し位。やはり形態移行への前兆なのか？

フォームチェンジ

今は考えても分からないので後で博士に聞くとして、とりあえずは今の感覚だけは忘れたくない。音速の先にある世界、その景色、その感覚……。

## 第六話 音速の先にあるもの（後書き）

いかがだったでしょうか、楽しんでもらえたら幸いです。

今回はちょっとヴァディム君に頑張ってもらいました、というのませっかく閃光という字を当てたので全ISSの中で最高速を誇ってもらいたいんですね。

個人的に、戦闘において一番大切なのは速さと思っているんで。

ではでは今回はこの辺で。

## 第七話 紅い左眼と碧い右眼

模擬戦で失ったエネルギーの回復も終わり、コンビネーションの特訓をする。

相変わらず、俺もラウラも個性がある機体だからこれまた難しいのなんのって。でもまあ、それぞれの個性を生かして戦闘状況を考えるのはこの先ISでは必須になってくるだろうから、いい経験になる。

段々とお互いの動きにも慣れてきて、いい感じにコンビネーションも取れてきた。多分この練習した後にあのAIC特訓をした方がいいんじゃないのかもしれないなかった。

「よし、少し休憩としよう」

とラウラが言ったので、俺は自室へと一度戻った。

アリーナから寮はちょっと遠いが、こっから唯一の男子トイレに行くよりは断然近い。それにあの封筒の中身も気になるところだ。

### 第七話

（紅い左眼と碧い右眼）

自室に戻って鍵を閉めた俺は、サバイバル用品入れの中からライ

ターを取り出してあぶり出しを行う。

紙を燃やさないように少しコツがいるが……、出来た。

『夕食前、生徒会室に来て』

生徒会室。

つまり生徒会長である更織楯無がいるところ、である。学園の長と自分で言っている彼女がどれだけの実力があるのかが気になるところだが、多分あのラウラよりも強いだろう。

更織楯無、専用機持ちでありながら代表候補生になっていない人の一人。自由国籍権をこの年で取得していて、それを行使しまくっているらしい。

そして、彼女もまた十一月の誕生日トバースに選ばれた人材。

### 【霧纏ミスティアス・レイディの淑女】

彼女が扱うB S I Sの名前だ。

スペック上では、専用機レベルのISとなんら変わりがないが霧纏の淑女には他のISには搭載することが不可能なものが搭載されている。

それが【アクア・クリスタル】である。左右一対の浮遊パーツからナノマシンで構成された水のヴェールを展開することにより、拡張領域に関係なく様々な武器を作り上げる。さらにそれは装甲にもなり、IS全体を包むのも容易である。

彼女の持つ武の才能とも併せて、かなり脅威になりうる。が、今のところ敵対勢力でもないので大丈夫だと思う。

多分、アレにはまだまだ不明なところが残されているはずだし、今のイズムルートで太刀打ち出来るかと言われれば正直勝率は六：四……いや、七：三で俺が負けるだろう。いくら音速を超えることが出来てもまだそれをものに出来ていない、そんなんじゃ学園の長に勝てるわけがない。

が、味方にしておかないと痛い。

B S I Sは世界に十二しかない。その内一つは姉さんが所持しているし、情報によるとあの組織でさらにもう二つ程所持しているらしい。今現在確定できているコアは四つ、確定できていないが敵が持っている可能性が高いコアが二つ、残り六つのコアの一体いくつがこっち側に回ってくるだろうか。

B S I Sではないが、一夏のI Sはまた特別だ。あいつも味方に付けていた方がいい、一年の専用機持ち全員も交渉対象と考えるも良いが戦争に巻き込むのは少人数のほうがいい。

「タイムリミットは刻々と迫ってきているのによっ……」

だが、今は突き進むしかない。

気持ちを切り替えてアリーナに向かう。

アリーナに戻ると、ラウラはAICの特訓をしているところだった。複数のマガジンを空に放り投げて、それら全てを完全停止させる。いずれ集中力が切れて落ちるがまた放り投げて……を繰り返しているようだった。

「ただいま」

「ん、ああ。始めようか」

「それにしても、ラウラが弱点を克服しようとしているなんてな」

「私の戦法の幾つかにはこのAICが用いられている、一対一の効力は凄まじくても一対多の状況でも使えるようにしないとこの先が危ない」

いつもラウラが急な戦闘を用心しているのか、それともこの先の未来を見越しているのかは知らない。たぶん前者だろうが、その心掛けは本当に凄いと思う。

俺なんかとは違う、戦争への執念みたいなもの。

「本当にラウラは優しいな」

「んなつ、私はただ戦争のためだけに作られ……」

「そんなことはない」

ラウラの言葉を途中で遮るようにして俺は言葉を紡ぐ。

「ただ単に戦争に勝ちたいのなら、味方を滅ぼしても構わない戦法

を取る」

「アレか」

「だが、今回の戦闘でラウラは『民間人、及び味方がいる状況下』での模擬戦を望んだ。つまり、目標に対して攻撃を当てつついかに他人にダメージを与えないようにする動きをしていた」

俺が二丁拳銃でラウラに射撃していた時も、ラウラは俺と自分の間に誰も置かなかった。

「……」

「だから、ラウラは自信持てよ。俺はラウラのことを信頼してる」

「いいのか？」

「いいもなにも、ラウラはラウラだ。他の何者でもない」

「私は、人とは違うんだぞ」

「それなら、俺だって一緒さ」

首をかしげるラウラをよそに、俺は辺りを見回す。幸い誰も見ていないようなので、ラウラに紅い左眼をさらす。

「っ、それは……」

「ラウラの『越界の瞳』ヴォーダン・オージエとは異なるけれども、似たようなもんだ。俺が開放すれば、力を得れる」

その時に失った代償として、俺は寿命の八分の一を渡している。どっかの死神よりは格安な取引だ。

「何故、お前はそれを望んだ」

カラーコンタクトを戻している途中にラウラに問われる。

「俺を必要としたイズムルートに乗るため、そして姉を懲らしめるために……かな」

もう一つだけ理由があるけれども、それは今語る必要はない。

「……強さとは、何だ」

「いきなりなんだ。だが……そうだな。使うべき力を使うべき時にキツチリ使えること、かな」

形振り構わず力を放ってしまえば、それは暴力となんら変わりない。

力を持っていても使わずじまいであれば、それは宝の持ち腐れだ。

そういうコントロールがキツチリできてこそ、その力は強さへと転化される。俺はそう思っている。

「ラウラにはラウラの意味が、俺には俺の意味がある。そして持つ力は人それぞれ違う、だから力は使いどころで様々な形を作るんだ」

「私は、まだ遠いな」

「俺だって、まだ遠いさ。だが、強さにゴールなんてない。走り続けること、突き進み続けること、その一瞬一瞬をかみ締めて強くなくていくんじゃないか？」

「それが、お前の強さか」

「まあ、そんなもんかな」

ラウラはふっ、と少し笑うと。

「私の強さは間違っていたようだ、力を得るだけでは意味がない…」。お前に教えられたよ」

そういうラウラの瞳は今までで一番輝いているように見えて。

その表情に、思わずドキッとしてしまっていた。

特訓も終わり、後は夕食を残すだけとなった。が、俺は生徒会長さんからの呼び出しで生徒会室に来ていた。

コンコンコン、とノックを三回して名前と用件を言うとすぐに通された。

「はあい、待ってたよ」

ドアが閉められてから、楯無さんは話始める。

「どうしてここなんですか？」

「ん、まあ秘密情報だし。それに……ここなら監視も盗聴もないし、声色が変わった、さっきまでのおちゃらけた感じよりも何段階か真面目になんた感覚。」

「その用件とは？」

「君、その左眼見せてみてよ」

カラーコンタクトであることは、既にバレていたようで俺は素直に従うしかなかった。

「ふうん、結構綺麗だね」

「俺にとっちゃ、ただの悪魔との契約の証ですよ」

「それで、君は絶大なる力を得た」

「……そんな大した力じゃないですよ」

「人並み外れた身体能力、動体視力に加えて脳細胞の活性化」

「よく調べましたね」

「まあ、悪魔と契約した人のほとんどがこれを結んでるからね。さらに君は特殊な契約も結んだ」

そこまで知ってるのか。

「過剰なまでに君は『速さ』を求めている、それは君がロシア軍で訓練していた時から明らかだわ」

「ちょっと待ってください、俺はロシアにこそいましたが軍と関わりはもってない」

俺の記憶をたどってみても、俺は軍にいた覚えはない。

「そのために呼んだ、とも言えるわ」

「一体何が……」

言いたいんですか、そう言おうとしたが口からは出てこなかった。その代わり、俺の目の前にはISを部分展開させている楯無さんがいた。

「私は真実を知りたいの、ゴメンネ」

半透明だった水が、紫、赤、緑、黄……様々な色に変色していき、気がつけば身体の中に入っていた。身体に異物が入ってきたのを感じて凄まじい吐き気を催し、すんでのところで自意識を保つ。

力を解放した時と同じように何かが身体に流れていることを感じるが、今は嫌悪感も感じる。それと同時に、頭の中をぐちゃぐちゃにかき混ぜられているようにぐるぐる回ると回る。

そこに自分はいるはずなのに、自分が自分じゃないような感覚。

『おかえり』

自分の姿、自分の声でそう告げられる。意識が朦朧としていく中で、それだけがハッキリと聞こえる。

一体何に対して俺はそう言っている？

一体何故俺はこうなっている？

それ以外にも様々な疑問をもったが、それを考えるだけの余力はもう残っていない。

俺は意識を手放した。

最後に、自分の姿をした紅い両眼の少年の笑みを脳裏に刻み込んで。

## 第七話 紅い左眼と碧い右眼（後書き）

いかがだったでしょうか。

ちなみに、容姿のイメージは皆さんのご想像におまかせしますが、自分はエヴァのカヲル君（瞳だけ色違い）をイメージしています。

さて、今回はまた新たな事実が発覚。楯無さんのISSをBSSISとすることになりました。設定的には本編とそう変わりないですが、色々とスペックだったり特殊効果だったり後付けで強化されていく感じですよ。

そしてラウラちゃんに対してもフラグをちょいちょい立ててみましたが、どうだったでしょうか。その辺の感想もいただけるとうれしいですよ。

今回は主人公の過去を少し明らかにしちゃいたいと思います。

## 第八話 虚栄だった真実

「どうしてそんな顔をしているのです」

「……ボーデヴィツヒか」

「さっきの訓練では好成绩だったじゃないですか」

「あんなもんは意味がない、実際の戦争ではもっと厳しい状況下で戦わなければならないんだ」

「なら何故……」

「俺は決めたんだ、姉さんを倒すことを。だからそのためなら何だってするさ」

「戦うことでしか、自分を実感できない？」

「よく覚えてるじゃないか」

「少佐の言ったことは、忘れないって決めましたから」

「そうかい、ありがとうよ」

## 第八話

く虚影だった真実く

今のは……、ロシアでの記憶、失っていた、いや封じられた記憶。最低でも俺とラウラの両名はこの封印にかかっているだろう。

いや、これは俺が望んだことなのか？

『おかえり』

「……………」

目の前には俺がいる、瞳の色だけ違って後は全部が俺。

『久しぶり、ですね』

急に久しぶり、なんて言われても……。いや、一つだけ心あたりがある。

「クロノーチエか？」

『当たり前です、よくも代償を……といっても今の私には必要なかったので手放しただけですが』

「どづいつことだ？」

『もう既に、検討はついでいるでしょ？』

「……………すまない」

『構いませんよ、どの道を進んでもこうなることは分かっていたから』

「どづいづことだ」

『始まるんですよ、私の大好きな大きな戦争が……』  
「コロシアイ」

「そんなに迫ってきてるのかよ」

あれから既に五年は経っている、しかしいくらなんでもこの戦争が起こるには確定要素がなさすぎる。

アイツらだつてこんな速い展開は望んじやいないのか？

『でも関係ないね、貴方と私なら』

「全ては、一瞬だからな」

『くくくつ……、あっははははは。やっぱり貴方は面白い、いや私を楽しませてくれる。君がエメラルドと共にある時からずっとね』

「なんとも言えばいい、俺は悪魔落ちなどしない。俺はあくまでも俺だ」

『私だつて貴方を悪魔落ちさせる気はないさ、寧ろ共存を望んでいるんだ』

「共存？」

『さしずめ三位一体トリニティってところか、貴方と私と彼女の』

「……面白い」

『それに、君の身体を借りることで私に生じるメリットもある』

「まだ生きる気かよ」

『貴方には分かりませんよ、長く存在し続けることの楽しみを。世界が変わる瞬間を目撃し続けることが出来る楽しみを』

「それがたまたま今回だっただけか」

『そうですね、今回は今までで一番強力な変化だ……貴方に感謝しない』

「で、再契約にかかる代償は幾らだ？」

『既に頂いています、“<sup>トバース</sup>十一月の誕生石”の選別者からね』

「そうか、って楯無さんが？」

『何度輪廻を回っても、彼女が選んだ者は皆心優しい……』

「今回もそうだといいのか」

『ええ、なんら変わりない……。しかし言うならば、誕生石の連中もこの状況は初めてのよう』

「どっぴいっことだ？」

『このISを用いた世界はどの輪廻にもなかった、だから連中も期待していますよ』

「勝手にされても困るんだが、第一俺がすることはただ一つだ」

『そこが私との意見の相違なんです、なんとかありませんか？』

「残念ならなんねえよ、これは俺の信念だ」

『“誰一人として殺さない戦争”……正直無理があるんじゃないでしょうか』

「だからこそ、速さを手にした。後出しでも間に合うくらいの速さを」

『確かに、今の貴方は音速を超える速さを手に入れました、ですがそれでは届かない手もあるのでは？』

「……」

『まあ、いいでしょう。貴方も戦争を味わった一人です、そしてこれを観れば気分も変わりますよ』

「ありがとうございます」

『いえいえ、例には及びません。私が望むのは変化と戦争、それも大きいければ大きい程良い。貴方はそれを私に与えてくれると信じていますよ』

「期待に添えられるかどうかは、真実を知ってからだ……」

『お見せしましょう、真実を。そして嘆くが良いでしょう、喚くが

良いでしょう、昔から決まっていますよ……知らないほうが良かったことの方が多いことを』

あの当時の俺は、ただただガムシヤラにもがいていた。

事件の後、父が作っていた二機のISについて知った。

一つは、後に俺のBSISになる五月エムラルドの誕生石のコアを持つイズムルト・フスプイシカ。もう一つが四月タイアモンドの誕生石のコアを持つ姉さんのBSISだ。

女である姉さんはもうこの時期にはBSISの適合者として誕生石から認められていた、そして母さんは姉さんが操るBSISによって殺された……。

その時の姉さんの表情は忘れることは出来ないだろう、いや、しないのだ。このことを胸に刻み続けていつかは姉さんに分からせてやる、あの行いがどれだけ愚考だったことを。

流れていく真実と自分の虚影を重ねながら、自分の半生を振り返る。

その日は生憎の雨だった、日本では超大型台風が接近していると  
いうニュースがひっきりなしに流れつつつけていた。

俺は台風が怖くて、あの時代では珍しく大型シエルターまで前日から避難していた。

「いくら台風が接近していても、流石にこの子の手入れは済ませておかないとね」

そこにあっただのはロシア代表であった母さんのIS一凍える風ヴェーチエリオ・リョートウ、母さんはクリスタルのペンダントとして首から下げていた。

母さんのポリシーとして、『自分を支えてくれることへは最大の感謝を』というのがある。それだからこのISの手入れというのは、母さんにとってヴェーチエリオに対する感謝の表れなんだと思う。

「僕も見えていい？」

そして、そんな母さんが大好きだった。

「いいわよ」

母さんが作業している隣で、邪魔にならないように眺める。自分がどうやっても動かせるものじゃないことを理解していた、だけれどもISというものには凄い興味があつて暇さえあれば色々調べていた。

「かっこいいね、やっぱり」

「将来はヴァディムが母さんにISをプレゼントしてくれるのかな？」

「うっん、僕はね頑張つて男の子でも乗れるISを作つてみたい」

「……そっか」

「それで空を自由に飛んでみたいの」

「アリサと一緒に飛べるといいわね」

「……お姉ちゃん、まだ帰つてこないのかな」

「本当に、心配……」

「そんなに心配してた？」

「お姉……ちゃん？」

ISを展開していた姉さんがいた、だがそれが姉さんだとは信じられなかった。

そこにいた姉さんは、瞳の色が逆転していた。白い瞳孔が見開かれ、狂つたような笑みを浮かべている姉さんは、当時の俺にとっては恐怖でしかなかった。

「ヴァディム、逃げなさいっ!!」

「フリーズ  
強制停止」

逃げようとしても、逃げれない。

足が全く動かない、口を開こうとしても開けない。

「あはははははははは、いい顔してるよヴァディム。でも、もつともつとイイ表情顔見せてほしいな」

その言葉を発し終えてから、姉さんは一本のナイフを投げた。

全ては、一瞬だった。

「うっっっ……」

母さん？

うめき声しか聞こえない、母さんがどうなっているのかもわからない、ただ一つ分かるのは……。

「やっぱり変わらないな……って、強制停止させてるんだったね」

さっきまでなんともなかった姉さんが、アカ色の斑点をつけていたことだった。

「んじゃ、ヴァディム。君は運命から逃れることは出来ないの。ゴメンネ、でも恨むなら……その人を恨みなさい」

「母さんが何をしたっていうのさっ!!」

叫んでも、喚いても、涙を流しても、何も無い。

既に母さんは息をしてなかった、だけれどもあの頃の俺には何も分からなかった。ただただ、あの時の姉さんの姿がエンドレスループしていた。

事件の後、父が作っていた二機のISについて知った。

一つは、後に俺のBSISになる五月の誕生石のコアを持つイズムルート・フスプシカ。まだまだ実践投入見込みは低かったが、この時点でイズムルートは俺を選んでいたらしい。

もう一つが四月の誕生石ダイヤモンドのコアを持つ姉さんのBSISだ。既に実用化がほぼ期待されていて、姉さんがいつ乗ってもおかしくない位だった。

その姉さんが事件の数日前に行方不明になって、それと同時期に父の研究所からイズムルート以外の全てのISが盗まれた。

明らかに、何かが仕組まれている……今となっては分かるが正直あの頃の自分はまだまだ幼かった。

この後俺は父に引き取られてロシアに行き、そこで母さんが入っていたロシアで一番のIS軍隊で訓練をしていた。

二年も経てば、次第に戦いとは何かを学んでいき自分なりに戦いにおいて速さが一番必要だという結論を出していた。そのころからイズムルートの基盤が出来てきて次第に自分に馴染む様になってきた。

ここから、俺の真実だと思っていたものは全て虚影だった。

だってそうだろう？

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。階級は少尉だ」

全ての歯車は、今よつやく意味を成す。

## 第八話 虚栄だった真実（後書き）

スイマセンっ、一話じゃ収め切れません。  
という訳で、過去編に突入します。

最初からちゃんとプロットきっちり立ててれば、こんなに早い段階で過去編に入らなかつた……。

と今更嘆いてもしかたがないのでここは頑張りどころです。  
さて、今から始まりました過去編ですがコンパクトにまとめたいと思います。

多分後二〜三話内には終わるんじゃないかと予想しつつ。

## 第九話 契約、そして輪廻のハジマリ

「そう言えば、今日は大佐が昼食当番でしたね」

「厳密に言えば俺のグループだが、どうした？」

「いえ、今日は金曜日なものですから」

「そうだな、金曜日はカレーの日だ」

「……大佐からしてみれば毎日がカレーの日では？」

「それも一理あるな、それに金曜日がカレーなのは確か海軍発祥だ」

「勉強になります」

「それにカレーは良いんだぞ？ 栄養もたくさん取れるし、色んな種類があつて楽しめるし、何より……」

「大佐、そろそろ昼食準備を」

「そんな時間だったな、では済まないな、ボーデヴィツヒ」

## 第九話

〈契約、そして輪廻のハジマリ〉

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。階級は少尉だ」

何故ラウラがこのロシア軍に？

「今年いっぱい、このロシア軍のIS隊で軍事指揮をとってもらったこととなっている。歳はまだ若いけど、ISのセンスや戦闘知識はかなり高い」

今のラウラとは違って、まだ眼帯をしていないラウラ。その綺麗な赤い双眼に見とれながらも、俺は真実を見続けた。

「俺は日崎ヴァデム、階級は気味と同じで少尉。とまあ、一年よろしくな」

挨拶が終わって手を差し伸べたが、その手はとられる事はなく。

「……」

ラウラはとつとどこかに行ってしまった。

「何か悪い事しましたかね、俺」

「さあ？ それより、自分のISのチェックを行ってね。本日はほぼISの訓練だから、自主トレってことで」

「了解です、准将」

それから俺はイズムルトのチェック（順々に出来上がっていく機体を見るのは、中々に面白い）を入念に行い、自主トレに移行す

る。

今はまだ、イズムルートが完全に動かないので俺はこういう地道な訓練を積み重ねる必要がある。

そしてその自主トレ中のことだった。

「ちよいと、お前さん」

極寒の地とも謳われるロシアでの長距離ランニングでいつものコースを回っていた俺に、とある老人が声を掛ける。

この老人を俺は知っている、見た目よりかなりの年数を生きながらえているクロノーチェル。その仮初めの姿だ。

「俺のことか？」

「そうだ、お前さんだ。ちよいと時間はあるかね」

「はあ、別に暇なんでいいですけど。……今日はちよっと楽をすることにしよう」

「それがいい、寒いから家にどうだい？」

もしかしたら拉致監禁されるんじゃない……とあの時も思ったが、ロシア軍の少尉ともある者がこんな老人に拉致監禁されたんじゃない俺の顔が持たない、とも思い、その考えはすぐさま却下した。

老人の家には何やら変な文様が家中に散りばめてあって、なんだか気味が悪かった。

「さあ、そこに座るがいい」

「ありがとうございます」

椅子を用意してもらい、それに座ってから辺りを見回して警戒する。盗聴、監視、それらの類があるかないか位は大体察しがつくが、この家からは感じなかったのでとりあえずは少しだけ気を緩める。

「さて……話なんだが、お前さん。力が欲しいとは思わないか？」

「力？」

「一目見て分かる、お前さんは心に多大な闇と憎しみをもっておる」

「っ、それがどうした」

「今のお前さんには何も出来やしないよ」

「あなたに何が分かる、今の俺はあの時とは違う。それにもう少しすれば……」

「五月の誕生石エメラルドの力を手に入れる？」

「……何故それを知っている」

「何、伊達に輪廻を何度もくぐってきてはないさ」

何を言っている？

今の俺には分かるが、先ほども言ったがこいつが時を司る悪魔。

クロノージャー

「どうだ、一つ契約を結んではみないか」

「契約……」

「そうだな、お前さんの寿命を八分の一程寄越せばいい。それだけでお前さんは人を超えた力を得る」

「……」

普通なら信じられないだろう、いや、普通なら信じないだろう。こんな奇妙な老人と契約？

そんなことをしただけで得られる力なんざたいしたことがないと大多数の人間が思うことになるだろう。

「分かった」

だが、俺は力を欲した。

相手はもはや人ではない、ならばこっちだって人じゃなくてもいい。悪魔に魂を売っても、別に俺は構わなかった。

もう母さんは戻ってこない、あの日常は帰ってこない。

「俺は力が欲しい、たった八分の一の寿命なんざ支払ってやる」

『やっぱりいつみてもここでの貴方は面白い』

いきなりなんだ。

『いや、君が真実にひれ伏すところを観に来ただけだ』

俺は決めたんだ、真実からは逃げないことを。

『それはそれでいいんですが……あ、契約が始まりますよ』

「……分かった、それでいい」

「勿体無いのう、そんなに綺麗な瞳なのに」

「なら変えるか？」

「くくつ、全然その気はない。寧ろ楽しみだ」

「ふん……まあいい」

老人が俺を中心として魔法陣を書き始め、そのまま契約の言葉を紡ぐ。

「契約、汝……私の力を欲するがままに、代償を払わんことを」

頃合を計らい、俺も契約の言葉を紡ぐ。

「契約、我……生命を捧げ、我が身を捧げよう」

「フデイツ・チーニク・ヴァミィ  
承認した」

その刹那、書き終えた魔法陣が俺の身体に張り付き、さらにどん

どん上に向かっていく。何かが蝕まれる、どんどん混ざっていく。

「ぐっ、あぐがあああああ……」

それらは最終的に左眼に集約されていく。

多大な痛み、どの拷問よりも強い痛み、そしてそれとは別に確かに感じる身体に流れる自分とは違う何か。

「ほう、これはこれは……」

数分後、痛みに耐えた俺は老人……いや、もう一人の俺をみた。

「なっ、姿が」

「いやあ、感謝しますよ。この身体は引き締まっていいていい」

明らかに口調が変わっていて、それはさながら紳士のようなだった。

「一体何が起こっている」

「一言で表すなら、輪廻……ですね」

「世界は輪のように回り廻る、それが輪廻」

「よく分かりましたね」

「それにしても、なんだか自分の身体じゃないくらいに重いんだが」

「貴方に八分の一程悪魔の血を流しましたから、慣れなくて当然で

すよ」

「はあ、そういうことは早めに言ってくれよ」

「いやはや、ですがそれでも貴方は契約を施す……違いますか？」

「……」

肯定する代わりに、無言で辺りを見回す。

身体能力の向上、および動体視力の強化と脳細胞の活性化。力を解放することでそれらは発揮されるが、普段の行動でも今までよりかは大分変わってくるらしい。

それと後二つ、時間を少しだけ止める力と自分自身の記憶を封印する力。

前者は、クロノーチエル時を司る悪魔との契約では絶対というほどに必要な力なんだそうだ。なんでも、一回で三秒止められるらしい。三秒って、なんだか短いような気もしないこともないが実際は結構長いし、今となつては音速への移行までの時間を稼げるのでいい。

そして後者は、なんか必要になるときがあるらしい。そしてその力を利用していることから、あいつの言ったことが正しかったというところでもある。

それに支払った代償は、寿命の八分の一。そして契約した証として左眼に刻印を押され、俺の左眼は紅く染まった。

「では、来るべき時にまた逢いましょう」

「ああ、分かった」

気がつけば、俺は最初にクロノーチエルに声をかけられた場所  
いた。

狐に包まれたような感覚だったが、ガラス越しに見た自分の瞳を  
見てこれが真実だと知った。

このまま軍に戻っても怪しまれるので、コース上にあるレイヤー  
御用達の店でカラーコンタクトを買った。試しに付けてみたが、違  
和感はそうなかったなのでこれで行くことに。

「只今戻りました」

「おお、ヴァディム。いいところに帰ってきた」

「一体何が？」

父は嬉々とした表情を浮かべて、俺に近寄ってくる。

「完成したんだよイズムルット・フスフィンシカ“翠玉の閃光”が」

父に連れられてみた、イズムルット。

初めての感覚……とは言いがたかった、以前に感じたような感覚？

いや、前の適合者達の感覚かもしれない。輪廻により繰り返され、

より進化するように仕向けられてしまう世界、ゼウス世界支配の神の強欲のままの完全なる完璧になるような世界。  
「ソフリート・オブ・バーフェクト」

まだ輪廻の途中ならば、運命はまだ決まっちゃいない。輪廻の収束、それを告げる鐘さえ鳴らなければいい。

「これが、俺のIS。……俺の翼」

「ヴァデイム、本当にすまない」

「いいよ、気にしないで。俺は俺の意思で戦うし、それになによりエメラルド五月の誕生石は俺を選んだし、タイファモン四月の誕生石は姉さんを選んだ。これだけでもう十分に俺がイズムルートとともにある条件は揃ってる」

「しかし……」

「今更何を言うのさ、父さんは東博士が託したコアを無下にするのかよ」

「……」

「父さんとして、科学者として、最高だよ本当に……そう思っている俺の気持ちまで無下にするのかよ」

「俺はお前が……」

「大丈夫だよ、俺には母さんの血が流れている。それにイズムルートだってある」

「……分かった。今からイズムルートについて説明する」

これが、俺が輪廻の歯車として動き始めた瞬間でもあり、俺の人生の一番のターニングポイントでもあろう。人の皮を被って、俺は生きる。

全ては、その一瞬のために。

## 第九話 契約、そして輪廻のハジマリ（後書き）

いかがだったでしょうか、第九話です。

ちなみに、この作品で扱われる悪魔や神々やらは実際の名前からちよこつともじったものが多く、正式なものとはちよつと違うのでその辺は許してください。

さて、今回はオツドアイになる経緯を書いてみました。

個人的に、かなり厨二臭くしてみたんですが……、どうでしょうか？

この過去編はコンパクトにまとめると決めたので、ちよつと中身がスカスカしてますが、ご愛嬌ということぞ。

これからのストーリーにも関わってきますし。

この過去編もいつか当時のヴァディム君の視点でしっかり書ければいいなと思いつつ。

ではでは。

## 第十話 囚われの過去

「大佐は、どうしてISに乗るんですか」

「まあ、空だって飛べるし」

「そういうことを聞いているのではなくて……」

「あまり人のことを詮索するもんじゃない、ボーデヴィツヒ」

「は、はい。申し訳ございません」

「そこまでかしくまらなくてもいいけれど、これを聞くにはまだ早い」

「まだ？」

「言うべきときがくれば、俺から言うよ。……だから、待っていてくれないか」

### 第十話

～囚われの過去～

「今日はイズムルートのデータ収集の日でしたっけ？」

「ん、ああそうだった」

「少佐、ボーデヴィツヒと模擬戦してみてくださいよ」

「ええっ、なんか企んでない？」

「そんなことないですって、それに少佐もボーデヴィツヒさんも今のところ負け無しなんですよ」

「どう考えてもボーデヴィツヒが勝つじゃないですか」

「少佐……。やらなかったら今度からカレー停止にしてもらいますよ、私の「コネで」

「よおし、気合入れて頑張るぞー」

「そこまでカレー好きなんですか」

「ああ、好きだ」

「……っ、とつとと行きましようよ」

「お、おつ。ってなんでそんなに顔が赤いんだ」

「気のせいですー!」

そんなこんなでスタジアム。事前にイズムルートのチェックは全て終わらせているし、今日は俺の気分も結構高ぶっているから良いデータがとれるといいんだが。

「……始める」

「ああ、よろしく願います」

開始の合図と同時に、俺は一気に間合いを詰めて打鉄用ブレードで切りかかる。

「温い、温すぎる」

「っ……」

見切られていた俺の攻撃はA I Cアクティブ・イナーシャル・キャンセラーで簡単に停止する。

「動きが単調すぎる、だから私に気づかれる、攻撃を許す」

大型レール砲カノンの装填が確認され、それが俺に向かって放たれる。

声を出す暇さえなく、俺はスタジアムの壁に突きつけられる。シールドエネルギーは今の三分の一も持っていかれ、正直愚かたしいようがなかった。

「まだまだ、これからだろ」

「少しは私を楽しませてくれ」

「じゃあ、まずはこれからだ」

現在の俺の十八番でもある連続瞬間加速マルチ・イグニッション・ブーストを用いて、不規則な移動を行いながらラウラに近づいていく。

これならA I Cに口ツクされることもないし、何よりハイパーセ  
ンサーを勝る機動力があるので攻撃開始にはもってこいだ。

「だから温いと言っているだろうに」

……それも今のスペックなら、の話だったようだ。どう考えても  
この時期ではイズムルートはまだ完成といっても、プロトタイプが  
という意味で使われているに違いはなく故に改良を重ねていた。

というわけで、簡単にA I Cに絡めとられている俺。なんという  
か情けないねえ、本当に。

「なら弱点を突くまで」

先ほど吹っ飛ばされたときに設置しておいたC 4爆弾を爆発させ  
る。

「ひあっ」

一瞬集中が解けたのか、A I Cが解除される。その隙について俺  
はブレードで切りかかる。

「卑怯だぞ」

「なかなか可愛かったぞ」

「かつ、ふざけるな!!」

とりあえず一撃は入れることが出来たが、それ以降は体制を立て  
直したラウラに全て止められていた。

その際にまたC4を設置しておくが、こんどはAICを発動してこない。

「お得意のAICはどうした？」

「同じ手には二度と引つかからんが、貴様にハンデをやるうと思つてな」

「そんなにビツクリするもんなのか？」

「ふ、普段なら問題ない」

その言葉は多分本当だろう、AIC中は意識を集中させているから聴力とかも敏感になるんだろう。

「まあ、AICを使ってくれないのならこっちも勝手がつく」

連続瞬時加速を行い、C4をばら撒きつつラウラへと接近する。

「同じ手は二度も通用しない」

「これは悪いが俺の戦い方なんでね」

今度はアサルトライフルを構え、攻撃する。

「ふん、甘いな」

軽々とその弾の雨を避けて、ラウラは逆にこっちに接近する。

「お前も近接のほうがいいだろう?」

「ありがたいことだね」

ブレードを展開して、立ち向かう。向こうはプラズマ手刀を展開している。何度か鏝迫り合いを行い、互いの力量を測る。

「ふん、こんなものか……」

そういつて離れていくラウラに対して俺は空のマガジンを放り投げた。

「っ、C4か」

「残念、ブラフでした」

一瞬気が緩んだのを見過ごさずに、連続瞬時加速から攻撃を行う。その攻撃中も加速を続けて、ラウラを地面に叩き落す。

「なかなか面白くなってきたじゃないか」

「全ては、一瞬だ」

「何を言っている」

ラウラの興がそがれない内に、俺はあらかじめばら撒いておいたC4を全て爆発させる。

「なっ、まさか」

その上、俺はガトリングガン二丁を取り出してラウラに放つ。

爆風にまみれ、尚且つ空から振る鉄の雨には流石のラウラでも対応し切れなかったようだった。

ふうむ、こつという戦い方もあるのか。参考になったな。

『そこまで、もういいぞ二人とも』

「了解、父さん」

「ま、待てっ」

「ボーデヴィツヒ?」

「……今度は負けない」

「ああ、また相手してくれると助かる」

この模擬戦がきっかけとなって、俺はラウラと仲良くするようになった。

「大佐っ、今日もお疲れ様です」

「ボーデヴィツヒも、お疲れ様」

あれから半年、俺は大佐までラウラは少佐まで昇格していた。後数ヶ月もすればラウラは自国であるドイツへと戻っていく。それでも、一番の収穫は自分には戦うことしか出来ない『人形』だと思い込んでいたラウラが普通に隊の皆とも話が出来るようまでになったことがあげられる。

どうしても俺が記憶封印を行った理由が未だ見つからない、というよりは寧ろ良い方向に向かってないか？

「ボーデヴィツヒ、今日はお前が食事当番だったな」

「はい、今日はシチューです」

「そうか、今日の晩飯はシチューか」

「いえ、昼食ですけど」

「……この際は何でもいいのか」

「何かいいましたか？」

「い、いや。何も言ってないぞ」

「大佐っ、今日はありがとうございました」

「俺のほうこそ、これでまたイズムルートも喜ぶぞ」

とある日の模擬戦が終わって、ラウラと話す。基本的にはずっと

ラウラと一緒にいて、なんだか初々しいカップルみたいで自分のことながら微笑ましくなっていた。

そして、徐々に速さを増していくイズムルートが現在の形に近づいているのを見て、感動をしつつ。

「日を増すことに速くなっていったる感じがします」

「そうだな……イズムルートがそれだけ高みに生きたい証拠かもしれない」

「ISに意識など存在しえるんでしょうか」

「さあな、だけどそうだったらいいなと思うんだ。俺は」

「それは何故です？」

「一人で戦うより、二人で戦うほうがいいじゃないか。精神的にも」

「なるほど、大佐らしいですね」

「俺らしい、か。それが一番しっくり来るならそれがいいだろう」

「はいっ」

「大佐……、今までありがとうございました」

「こっちこそ、ボーデヴィットがいてくれて凄い成長出来た気がします」

るよ」

丸々一年が経ち、ラウラがドイツに帰る日の前日。ロシア軍ではラウラの送別会なるものをしていた。

最初は誰とも接しなかったラウラは、今は皆と一緒に笑えるようにま で な っ た。

「この一年、本当に色々とありました」

「ああ、そうだな。始めの方はボーデヴィツヒは凄く冷たかったからな」

「っ、申し訳ございません」

「いやいや、いいんだ。今は違っただろう？」

「はい、本当に大佐には感謝してもしきれません」

「俺だけじゃなく、隊の皆にも感謝すべきだな」

「はい」

「今度、俺もドイツでのボーデヴィツヒを見に行くから」

「本当ですか」

「ああ、本当だ。それにドイツの力も推し量れるし」

「私はずいですか……」

「冗談だ、お前に会うためにドイツに行ってる」

「大佐……」

「はいはい、ラブコメはいいから。今日は楽しんじやいませよ」

ラウラが旅立ってから早二ヶ月、俺はドイツへと旅立った。ロシ  
ア軍からの命令があったので、という建前を連れて。

だが、そこで俺が見たのは惨劇だった。

「この度はどうぞいらっしやいました、日崎大佐殿」

「そんなにかしこまらなくてもいいですよ、俺はそんなに偉くはな  
い」

「いえ、これはわが軍のポリシーですから」

「ボーデヴィツヒもそういうところは聞かなかったからな」

「……その件なんですが」

「少佐っ、大変ですっ！」

「何をしている、今は大事な会談中だぞ」

「申し訳ございません、ですが遺伝子強化試験体が暴走を」

アドヴァンスト

「番号は」

「C-00037です」

「どうかしましたか？」

「いえ、こちらで実験中のISが暴走してしまったみたいで」

「なんならお手伝いします」

「それはありがたいんですが、いかせん条約に反する可能性が」

「条約？ ああ……何も見なかったことにしてくれると助かる」

「……すみません」

「何のことでしょうか、俺はこのイズムルートの試運転に行くだけですよ」

行かなければよかった、そう思ったときには既に遅い。

後に悔やむから後悔なんだ、先にあるはずがない。悔やむのはいつだって何かが起こった後、そして無力な自分に憂いを感じる。

ボーデヴィツヒ、お前は何故そんな顔をしている？

何故そんなところで騒いでいる？

俺は何故、こんなにも無力なんだ。

## 第十話 囚われの過去（後書き）

いかがだったでしょうか。

次でこの過去編もフィナーレを迎えます。

さて、戦闘させてみました。

なんかちよつとチープな感じになったかもしれないですが、そこはあえてそうなるようにしました。臨場感があまりないような感じの戦闘、とっていただけると幸いです。

次も戦闘ですが、こっちの方は頑張って臨場感が伝わるように頑張りたいと思います。

## 第十一話 真紅の双眼と黄金の左眼

「なあ、ポーデヴィッツ」

「なんでしようか」

「この間、聞いてきたよな。『どうしてISに乗るか』」

「はい」

「聞かせてやるよ、その理由」

「……はい」

「俺は、復讐をするためにISに乗ろうとしていた。けどな、そんなものためにISを使っちゃいけないって気がついた、これは人を陥れることの出来る凶器でもあるが、人を守ることに出来る希望でもある。ならば俺はその希望の方を選ぼう、とまあそんな感じだ」

「人を守るため、ですか」

「ああ、ポーデヴィッツやこの軍の皆。それ以外にもたくさんの人々を守るために」

「良い決意ですね」

「そうだろ、これがあつたからこそ俺はここまで生きているし、これからもそうして生きていく」

## 第十一話

く真紅の双眼と黄金の左眼く

暴走を始めたラウラは俺が見たこともないぐらいに狂気に満ちていて、そして尚且つそれは自然と“鬼人”を連想させた。……いや、もつと言つならば“鬼神”だろうか。

「なんだよ、アレ」

「アドヴァンスト遺伝子強化試験体C・0037でして……」

「そんなことを聞いてるんじゃないっ!」

「何をそんなに怒り狂ってるんですか」

「何故、ボーデヴィツヒがあんなになってるんだ。それに左眼が金色になっているのも気になる」

「ボーデヴィツヒ……? ああ、あのゴミ屑の名前でしたね」

「ゴミ……屑だと?」

「ええ、ヴォーダン・オージエ越界の瞳適合前と後じゃ天と地の差だ。あんな屑、本当はすぐに処理すべき……」

「ふざけるなっ！」

俺は思わず相手を殴ってしまった、いや、殴らずにはいられなかった。流石に今の俺でも殴りはしないが、結構腹が立つ言葉だな、おい。

「ボーデヴィツヒは戦うための道具じゃない、お前らの人形でもない。俺が、俺が……」

「まさかアレに惚れたのか？ ふん、馬鹿馬鹿しい」

「っ……。ボーデヴィツヒを、ラウラを返してもらおう」

「処理していただけると、ありがたいんですがね」

「一つ、二つ、三つ……」

瞳を閉じて、『俺』はそう心の中で呟いたのだろう。次に眼を開いたときには、両眼が赤く染まっていた。

「……失せろ、俺が気分を害さないうちにな」

「は、はい……」

『この時の貴方は本当にカッコよかったですけどねえ』

この先を知っているのなら、少し黙っていてほしい。今の俺の判断が正しいなら……いや、多分『俺』は負けるだろう。

その理由は明確だ。こっちも越界の瞳に対抗すべく、力を解放し

ているが……かなり分が悪い。まず、相手がラウラだということ。そして次に俺はラウラに一切危害を加えずに助けなければならぬこと、最後に、今までのラウラより各段に強くなっていることが拳げられる。

『それで、今の貴方は臆しますか？』

いや、全然。

そして、この時の俺も絶対に同じ考えだろう。ラウラに惚れてるなら、尚更だ。

『いまどきにしては珍しく、貴方は好きであることを恥ずかしがりませんね』

ラウラだからさ、きっと。俺はラウラだから好きなんだ、胸を張って好きだと言えるんだ。

「今、助けるよ。……ラウラ」

真紅の双眼が暴走しているラウラを捕らえる、三秒ルールトゥリー・セコンダが使え  
るのは七回。

その七回が結構重要になってくるし、その七回を活かせないと……。

「三秒ルール」

『早くも一回目、発動しちゃったねえ』

まずは一度様子見で使うのには悪くないが、それも期限があるものに使うのは解せない。三秒なんてすぐに終わるぞ？

と思っていたが、結構甘かったようだ。考えもなしに突撃するよ  
うな馬鹿じゃない、自分の事ながらそう思いたい。

イズムルートの機動力を利用して、一秒立たない内に後ろに回り  
こみ、そこからアサルトライフル二丁で連撃を加える。

すぐに三秒が経つが、ラウラに結構なダメージを与えられたはず  
だったが、それも空しく。

「はあっ？　今でシールドエネルギーを250程度しか削れてな  
いだと？」

普通ならばあの攻撃はシールドエネルギーを半分削るには良い攻  
撃なはずだったが、その半分程度のダメージしか通ってない。

「ヌルイナ……」

「くっ、一旦離れないと」

AICを警戒して、ジグザクに後退したがその必要はないみたい  
で、今のラウラにはAICを使う気配が見られない。暴走している  
というのもあるのか？

「オソイ……」

「マジかよっ」

と、次の瞬間には眼前に迫るラウラ。先ほどまで狂気に満ちて叫んでいたとは思えないほどに冷徹な瞳と、冷淡な声。

だが、それから感じられるのは多大な殺戮の感覚。

「クロス、クロス、クロス……」

「ぐっ、あがぁ……」

殴られ、蹴られ、切られ、撃たれ。

様々な攻撃を加えられて、俺もイズムルートもボロボロだった。今までこんな敵に出会ったことがない。

見ていられないほどに、圧倒的な暴力。機体維持警告域はもう既に超え、操縦者生命危険域へと突入する。レッドゾーン

それでも尚、攻撃を続けるラウラ。

何がこんなにもラウラを苦しめる、何でこんなにラウラが苦しめられる？

「三秒……ルール」

それを駆使して、逃げるのが精一杯だ。その三秒ルールでさえ、後一度しか使えない。

「瞬時加速すら使えないか……なら」

何を考えたのか、三秒間で『俺』がしたことはただ一つ。

『ひゅ〜熱いねえ』

ほざけ。

「ナン……ダ？」

「ラウラ、済まなかった」

ラウラに抱きついていた。

「お前を苦しめてしまった、お前を助けてやれなかった。俺は無力だ、本当に屑だ。だからお前に泥を塗ってしまった、お前を傷つけてしまった」

「コロ……ス、クロス」

無常にも、ラウラの攻撃は止まらない。が、その手は徐々に弱くなっていつている。それに『俺』が抱きついていいるから、強い攻撃も打てない。

「もっと早く、来ればよかった。いや、もっと早く伝えておくべきだった」

「ハナセ、ハナ……セ」

「好きだ、ラウラ」

「タイ、サ……？」

「ああ、俺だ。日崎ヴァディム、ロシア軍特別IS部隊の大佐だ」

「……大佐」

そこで、ラウラの意識は途切れてそれと同時に暴走は止まった。

「ラウラ……」

だが、そこで待ってたのはやはり厳しい現実だった。

「記憶喪失？」

「ええ、遺伝子強化試……ではなかった。ラウラ・ボーデヴィツヒは、ウォーダン・オーシエ越界の瞳に対応しきれなくなって暴走、そしてそのときに脳細胞に異常が起こり、記憶喪失になったんでしょう」

「それ以外に何か負傷はあったんですか？」

「奇跡的に他は何もありません、身体も貴方が頑張ってくれたのでダメージは皆無です」

「そうですか……」

「それよりも、医者としては貴方の身体の方が心配ですよ」

「こんなもん、ラウラが感じた痛みには比べちゃなんてことはない…

……」

「本当に、申し訳ございませんでした」

「何を誤る必要がある」

「正直、私はこのドイツ軍のやり方があまり好きではないのです」

「……」

「ISで、なにもかもが変わってしまった」

「だが、ISで悪くなったことばかりじゃない」

「そうですね」

「……だが記憶を塞ぎたい気持ちは分かる、俺だって辛い」

「はい」

「ところで、これからラウラはどうなるんだ？」

「ええと、第一回モンド・グロツソ優勝者である“ブリュンヒルデ戦乙女”こと日本代表の織村千冬さんが特別コーチをすることになっています」

「そうか……なら、いい」

「えっと、どちらへ？」

「帰るんだ、ロシアに」

そう言って、無線機でロシアから要請を頼む。

……きつと『俺』も辛かったんだろう、たった一年とは言え初めて好きと言える人が記憶喪失になったなんてな。そうやって塞ぎこみたい気持ちは分かる、そして塞ぎこんでしまったのも分かる。

迎えに連れられて帰国した後、五日間『俺』は飲まず食わずで籠った。ラウラが受けた痛み、それとは程遠いがかなりの痛みを受けただろう。そして六日目、俺は記憶封印能力を使い……イズムルトを手にしてからの記憶を封印した。

それと同時に生まれたのが、俺が今まで本当だと思いついてきた“偽りの記憶”。真実を知ること、今までの記憶が幸せだったかのような錯覚を受ける。だが、現実に向き合わないといけない。

どうやっても、輪廻に巻き込まれることは確かなのだから。

俺が運命から逃げるために……いや、立ち向かうことを恐れたからこそ使った能力。今の俺には、十分すぎるほどにその衝撃は大きかった。

「どうか、お目覚めは」

「楯無さん？」

気がつけば、生徒会室で横になっていた。

「真実を知った気分はいかが？」

「なんとというか……、その」

「残酷だった」

ズバリと言い当てる楯無さん。

「そうですね、俺が信じていたものは偽りだったし、なにより俺のせいでラウラを傷つけてしまっていた」

「輪廻を感じたでしょ」

「はい、今までより強く……」

「うん、君は合格だね。もう出て行っていいよ」

「用件はそれで終わりですか？」

「ええ。もう既に『診た』から」

「そうですか。では、失礼します」

なんだか物凄いやさっぱりとした感じで終わってしまったが、きつとこれでいいんだろう。俺はちょっと頭の整理がてら眠りたい……。夕食食べてないが気にしないことにしよう。

もうすぐ、トーナメントも始まる。あの時に言った言葉は、今でも変わらなく俺の中にある。ラウラが好きだって気持ちは変わらずにそこにある、これが終わったらラウラにまた伝えよう。

だから今は……、ちょっと一休みしよう。

## 第十一話 真紅の双眼と黄金の左眼（後書き）

今回で過去編は終了です。

いかがだったでしょうか？

書いていて若干涙ぐみながら、ラウラさんを暴走させてしまいました。  
た。

まあ、現在のラウラさんは色々と元気なのであしからず。

そして次回からトーナメントが開催されます。

戦闘描写に悩みながら頑張りますので、是非続きもよろしく願います。

## 第十二話 開幕！ 学年別タッグトーナメント

あれから数日が経ち、今日から学年別タッグトーナメント。

個々の技術の向上、連携の基礎、そして個人戦より専用機持ちに勝てるチャンスを増やすためというのが表向きの理由だそうだ。実際のところ、トーナメント中に何かの襲撃があってもいいように、ということらしい。

ガードが堅いIS学園なのに、それをくぐって先月のクラス代表戦では無人機のISがアリーナを襲撃したらしい。それで、警備もかなり増強しているそうだ。

口外しない、という理由でその無人機のデータを（織村先生から）見せてもらったが……。これはそうとうヤバイ、即座にそう感じた。既に東博士にコアの鑑識を（織村先生直々に）頼んだそうで、その結果。

そのコアは東博士が創ったものじゃないと知る。その東博士曰く、『こんなまがい物、十全にして完全な東さんが作るとでも？』

それなら、ISを偽りのコアで動かせる……。もしくはISと同等かそれ以上のまがい物を生成できる人物がいる、ということになる。そして一人だけ、たった一人だけだが俺はそれが出来そうな人物を知っている。が、真っ先に否定した。……。ただ俺がそうしたかっただけかもしれないがな。

## 第十二話

「開幕！ 学年別タッグトーナメント」

タッグトーナメント初日の朝、俺はミーティングがてらラウラと朝食を摂っていた。

「それで、ルールが今日になって改定されたんだって？」

「ああ、抽選の結果とも関わってきたからだろう」

ラウラが取り出した一枚の紙に、今回のルールが全て記載されていた。

なかでも特筆すべきなのは、対専用機に対するハンデの項目だ。

『以下の項目は全て対専用機時に有効となる』

一、専用機のシールドエネルギーを通常の半分とする。

二、専用機の瞬間加速禁止イグニッション・ブースト（尚、それに順ずる加速も禁止とする）

三、ビット兵器の使用禁止

四、専用機が最大で扱える武器は一試合五つまで（拡張領域に入れることは許可する）

五、単一使用能力ワン・オフ・アビリティや機体特殊能力は禁止とする

尚、全ての機体が専用機、または全員の一致があればこの限りではない。

「……なあ、ラウラ」

「多分私も同じ考えだ」

「何だよこの専用機アンチ」

どう考えてもやりすぎだ。しかも、瞬時加速を禁止されたとなると俺の攻撃方法は確実に減少する。いや、現象どころの騒ぎではない。イズムルートは速さがないとほとんど意味がないに等しい、いや、意味がないとは言いすぎだが機動力がほかの機体より優れているだけに過ぎない。

「だが、条件は一緒だぞ」

「この中じゃ多分セシリアが一番被害受けてないな」

「まさか泣き言を言うのか？」

「そんなわけないさ、瞬時加速がなくてもイズムルートがそこで終わるはずがない」

今日は試合数の条件からして、一回戦だけしかない。その一試合で瞬時加速を使わない戦い方を見出ださないことには始まらないな。

「ならば見せてくれ、私に」

「ああ、そしてこのトーナメントで優勝したら……」

「おおい、ヴァン。今日は朝早いな」

くそつ、邪魔すんじゃないねえ。

「……何だよ」

「え、ただ挨拶をしにきだな」

「人の心配をする余裕があるのか、貴様に」

「そつだ、お前から瞬時加速と零落白夜をとつたら何が残るんだ？」

「い、痛いところを……」

「ふん、勝つのは貴様たちじゃない」

「ハンデなどものともにしない」

「俺（私）達だ」

そつだ、ハンデなどもろともにしなければいい。瞬時加速がなくたって、連続瞬時加速がなくなつて、俺は勝つ。どうせなら三秒ルトゥリー・セールクインダだつて使わなくてもいいさ。俺は……いや俺とイズムルートは負けない。

開会式も無事に終わり、対戦表が発表される。俺とラウラは一回戦を三組ペアと戦うことになっていて、もちろんあのハンデは適用されるようだった。

「一夏シャルルペアとは決勝まで当たらなさそうだな」

「ふん、その方が上がってきた鼻を落とせるから丁度いい」

……一体この二人の中で何が起きてるのが、俺にはわからないが何故だか無性に腹が立つ。絶対ポコポコにしてやるから、それまで負けるんじゃないぞ一夏。

ついでにイギリス代表候補生は、俺らのブロックで反対位置にあるので準決勝で当たることになる。ちなみに、ペアは篠ノ之箒だった。

篠ノ之箒……。七月の誕生石ルビーに選ばれた人材であるが、今だに輪廻を知らないからある意味羨ましくもある。まあ、東博士がまだ伝えてないということも挙げられるけどな。

しかし、自分の制御化に置けない物をよく妹に預けられるよな……。しかし完全なる完璧コンプリート・オブ・パーフェクトを名乗る博士のことだ、何も無しで彼女にBSSISを渡すはずがない。

「とにもかくにも、まずは目の前の戦だが……」

俺達の試合は昼からなので、どうしようかと思っていたが一夏とシャルルが第一試合で試合するのでそれを見ることにした。

「お、セシリアじゃないか」

「ヴァディムさんにラウラさん、ご機嫌よう」

「あれ、篠ノ之は一緒じゃ無いのか」

「私も声をかけましたが、何故かないのですわ」

「……そんな話はいい、始まるぞ」

ラウラにそう促され、俺も慌てて観客席に座る。間もなくしてカウントダウンが各学年で一斉に始まり、試合がスタートする。

と同時に、一夏が機動力を活かして（瞬時加速にならないようにして）加速をし、先手をとったようだった。

「一夏、なんか器用になったな」

「あれが普通ですわよ」

「私からしてみればまだまだ無駄が多い」

辛口だな、お前ら。

一夏が先手をとった方（面倒なのでAさんとする）にシャルルも加わり、一気に片方を潰す作戦なのかシャルルがアサルトライフルを取り出す。射線上にもう一人（同じ理由でBさん）が物理シールドを構えて入る。

一夏とシャルルのペアもそうだが、結構連携が出来てきている。この短い期間からしては中々のレベルだと思うし、そういう意味で

はこのルールは良く出来ていると言える。

そして、対専用機のハンデもかなり効いているようだ。通常の半分のシールドエネルギーで戦っているからか、シャルルは動きが若干防御に回っている。

一夏？ 残量なんか気にしてないだろうよ、零落白夜も瞬時加速も使えないんだからな。普通とほぼ同じと考えてるだろうよ、多分な。

そう考えてみると、俺も加速に使っていた分のシールドエネルギーを機体のHPに回すことが出来るのか。

そんなことを思案している内にシャルルがBさんを撃破、続いて一夏もAさんを倒して二人は一回戦を突破した。

「流石に一回戦負けはないか」

「決勝まで来てもらわないと困る、あいつをこの手で潰せないからな」

「同感だ」

「さて、後の試合は興味が無い。私は期待のチェックをしに行く」

「じゃあ俺もイズムルートのチェックをしに行こうかね」

「ちょっと、私を差し置いて何を言ってますのっ」

セシリアが何か言っているが、別に関係がないので無視をしてお

く。

ラウラと別れて整備室に行く途中に、試合を終えた一夏とシャルルと出会った。

「二人とも、お疲れさん」

「見てくれていたんだ」

「どうだった、ヴァン」

「中々良かったんじゃないか。ラウラとセシリアは辛口だったが」

「決勝まで負けるわけにはいかないからね」

「ああ、お前とラウラをぶっ飛ばす」

「言ってくれるじゃねえか、シャルルはともかく一夏はアウトオブ眼中だ。お前はラウラに叩きのめされちまいな」

「絶対負けない」

お前如きがラウラに勝てるわけがない、年季が違う年季が。たかが二ヶ月そこら動かしたことがある素人に負けたんじゃラウラのプライドが傷つくし、もちろん俺がそうなる前に一夏を叩き潰す。三秒<sup>トビ</sup>ルール<sup>リー・セクインダ</sup>を用いても、だ。

「その前に君が僕に叩きのめされないでね」

「道化師には負ける気はしないな、手数が多いだけでは場は圧巻で  
きない」

「言ってくれるじゃない、その言葉……最後まで覚えておいてね」

顔は笑っていたが、目が笑っていなかった。シャルルが女だと言  
い当てた時みたいに、強い殺気を感じて思わず身震いをする。……  
何故こんなにも俺が怯える必要があるんだ、ラファールもシャルル  
自身もそこまで大したことはない。

だが、その油断が命取りと錯覚させるかのような笑み。

……少し警戒を強める必要があるようだ。

「じゃあ、バイバイ」

「俺も行って来るよ」

「……ああ」

過ぎ去っていく二人を見送ってから、俺は整備室へ向かいイズム  
ルート最終チェックを行う。たかが一回戦だがされど一回戦、そ  
の二つ二つの戦いをしっかり刻み込まなくちゃいけない。だからこ  
そ、イズムルートには万全の状態でいてほしい。

俺と一緒にこの先を進んでいく相棒だし、何より俺が守りたいも  
のを守れるだけの強さがある。力を使うべきときに使える、そんな  
相棒。俺と共にまだまだ進化していくイズムルートを見つめながら  
俺はそんなことを考えていた。



**第十二話 開幕！ 学年別タッグトーナメント（後書き）**

トーナメント編開幕っ！

このトーナメントも若干どころじゃなく原作ブレイクしていきますので、私としてはきちんと進めていけるかどうか少し心配ですが、頑張って生きたいと思います。

今回はヴァディム&ラウラペアの一回戦の模様です。

### 第十三話 トーナメント初日、二日目

「そろそろ試合だ、準備は終わっているか。ヴァディム」

「ああ、準備万端だ。いつでもいける」

整備室から直接アリーナへ、昼飯は整備室に備えてあったカップ麺を拝借した。後で追加で一つ持っていくと言ったら、普通にくれた。

とまあ、そんなどうでもいいことを考えながら歩いていける分にはまだまだ余裕だな、俺も。今のところは何の心配もない、打鉄とラファールのデータは収集済みだし、その上での仮想戦闘もバツチりだ。

あの時に真実を見てからは、俺の身体に二つ分とも思われる記憶が混在しているのでそういう軍閥連で覚えた行動が出来るようになった。そう考えてみれば、少しラッキーなのかもしれないな。

「なら問題はない」

「それに優勝するまでは負ける気がしないね」

パートナーに恵まれ、ISにも恵まれて、これで負けたなら本当に恥だ。

一夏やシャルルには悪いが、俺達が優勝させてもらう。弱肉強食

……、ISでこの言葉を用いることに少し抵抗があるが今回はあえて使わせてもらう。

### 第十三話

〈トーナメント初日、二日目〉

『それでは、両ペアは所定の位置について下さい。後三分で試合を開始します、繰り返します両ペアは……』

「行くぞ、ヴァディム」

「了解」

ビットにいた俺達は、各自ISを展開させて所定の位置に向かう。ハイパーセンサーを用いて相手の顔を伺ったところ、どうも緊張しているらしい。

まあ、初戦が俺達なんだから無理もあるまい。授業で模擬戦はあまりやってないようだし、放課後の訓練もたかが知れている。

ISにおいて、累計稼動時間というものはスペックを凌駕するほどに重要である。ISを稼動させた時間が長ければ長いほどに、そのISは所持者に馴染み所持者はそのISに馴染む。

だから、専用機持ちというのはアドバンテージが大きい。それ故のハンデ構成なんだろうが、いかんせん弱すぎる。

「どう思う、ラウラ」

「雑兵だな」

量産機、というのは前述した累計稼働時間がリセットされる為（リセットしないまま続けると、ISが次第に拒絶反応をする為）にISの成長がない。つまり、スペックデータが全てを語っているの  
でこちらとしてこれほどまでに戦い易い相手はない。

本当に、父さんがISの技術者で助かったよ。

『カウントダウンを始めます』

「じゃあ、一気に決めるか」

「勝負は常に全力でやらなくてはな」

『五……、四……、三……、二……、一……。それでは始め』

「俺は打鉄をやる、ラウラはラファールを」

ヤ・ヴォール  
「了解」

イグニッション・ブースト  
瞬時加速を封じられているので、それは使わないが、全スラスト  
Iを用いて加速する。それをしながら二丁拳銃を展開しつつ威嚇射  
撃。

「あつ、ちよつとタンマ……」

「残念ながら、勝負に待ったはない。俺と試合したことを後悔する  
んだな」

既に近くまで向かったので二丁拳銃を収納しつつ、ツインダガーを展開する。そして、連打攻撃でシールドエネルギーを削っていく。

「まだまだっ」

シールドを展開され、連打攻撃を止められる。

「中々だ……だが、甘いな」

シールドに阻まれながら、身体を急速回転させて後ろをとる。

「そんなっ……」

「アドミニクランシチャ終了の知らせ……降伏しろ」

セシリアと戦った時にもしたが、背中と首筋にツインダガーを突き付ける状態。このままISの装甲に刃を突き立てて、出力を出しつづければ数秒でシールドエネルギーは尽きる。

「仕方がないですね……」

「賢明だ」

俺はツインダガーを収納して、ラウラの方に向かおうとする。が、そんなことは無用だったみたいだった。

『勝者、日崎&ボーデヴィツヒペア』

既にラウラは勝利を収めていて、こちらの戦闘を見学していたよ

うだった。……ってか、あの短時間で俺より先にシールドエネルギーを全部削ったのかよ。

「遅かったじゃないか、ヴァディム」

「いや、ラウラが早いだけだろ……」

後で話を聞いたところ、ワイヤーで絡めとってからプラズマ手刀で切り掛かりつつ、チャージしていたレールカノンをぶっ放したらしい。

なお、その間相手は微動だにしなかったとさ……。いや、出来なかったんじゃないのか？

真相の程はわからないが、とりあえず一回戦を無事に勝てたことにはかわりない。

今日は試合数の関係で、一回戦しか行わないが明日で準決勝まで終わらせるみたいだ。二回戦から五回戦まであるので、最大で四回試合がある。

「続きは明日、か」

「不満そうだな」

「いや、まああっけなかったし」

「ふっ……、お前も私と似たようなものだな」

「折角だからラウラと練習したコンビネーション使いたいしさ」

「そつ、そつだな、折角練習したんだしな……」

なんだかたじろいでいるラウラ、何か変なこと言っただけか？

いやまあ可愛いから何も言わないでおくが、あまりじろじろと見ないようにはしておこつ。

「とにかく、今日はお疲れ様」

「っ、ああ。じゃあまた明日なっ」

そう言ってダッシュで帰ってしまった。……あ、夕食を誘うの忘れてた。

翌日。

朝から試合があつたが、難無く二回戦、三回戦ともに突破。昼休み後すぐにあつた四回戦も終わり、最後の試合だった五回戦もさつき終わった。

……やっぱり感覚の違いから起きるのか、それか操縦にまだ慣れていないせいなのか、相手は色々ともたつていることが多い。

「……次の試合は明日か」

「ああ、そうだな。それにしてもラウラ、なんか不満そうだな」

「どいつもこいつも、ISを何かのファッションか何かと勘違いしているのかっ」

「しょうがないだろ、『ISは兵器になる』なんていう授業は彼女らは受けていないはずだ。それにシールドエネルギーと絶対防御によって、相手に与える身体的ダメージは少ない」

「それはそうだが……」

「ISは兵器ではなく、単なるスポーツで使う道具である。そう思わせないと、この学園にも生徒は集まらないし、ISが発展する可能性も激減する」

「……」

「ラウラの言い分もあってる。いや寧ろラウラの方が正しいだろうな、俺はそう思うよ」

「すまないな」

「謝る必要はないさ、どう考えていようが個人の自由だからな。……ところで、今日は夕食一緒にどうかな」

「分かった、また連絡を入れる」

そんなこんなでラウラと分かれた後、トーナメント表を確認する。準決勝でセシリア&篠ノ之ペアと戦うことになり、順当に行けばその次の決勝では一夏&シャルルペアと戦うことになる。

ブルー・ティアーズに関しては一度戦ったこともあるし、問題点はそこまでないが……。いかんせん篠ノ之の方、東博士の妹の方がデータが無い分色々と問題だ。

専用機が出る心配はまだ要らないと思うが、こういう演出とか東博士結構好きらしいから……。 “白騎士事件”とか、もろその系統だし。

七月の誕生日のコアを用いたBSIS……、現行ISのスペックを上回ることが予想されるが機動力に関してはイズムルートが負けるはずない。

シユヴァルツエア・レーゲンのスペックでは、多分BSISは超えられない。累計稼働時間の差があっても、制御装置コントローラーのレベルによってはそれを上回るだろう。

そうだとしたら、少々心配だがこつちも制御装置のレベルを調整しておかなければならない。

BSISを完全制御できなかつた東博士が、唯一残してくれたものでもあるから篠ノ之の専用機であるBSISには制御装置のレベルがそれなりに設定されているとは思うが、実際のところは分からない。

一つ間違えれば、国一つを破壊するに値するエネルギーが秘められている誕生石のコアだけに、それに関する心配だけは尽きない。

幸いなことに、未だBSISが関連した事件や事故はまだ起きていない。だがそれも十二機が揃った時点できつとアウトだし、それより前に封切することも簡単だ。

『どうやっても、拭えないようですね。戦争への意識は』

クロノーチエル……。

『貴方がそう思う理由は少し分かりませんが、現実には起きるべくして起こりうり、奇跡や偶然なんてものは存在しません』

輪廻が有る限り、か。

『ええ、ですがその奇跡や偶然を見出だすことで輪廻から外すことが可能となるでしょう』

実証されていないのに、よく分かるな。

『分かる、というよりは感じるのです。今がどの輪廻を辿っているのかが、だからこそ今までに感じたことのない感覚に頼りながら私は生きながらえるのです』

変化、ねえ。

『その中で、貴方に出会いましたが今までで一番貴方が面白い人物ですよ』

それは誕生石に選ばれた者達の中でってことなのか？

『いえ、輪廻に関わる全ての人でと言うことです。輪廻が廻る中で、世界は一つの変化を繰り返しています』

どうということだ？

『必ずしも、輪廻に関わる十二の“力”は誕生石だけではないんですよ』

例えば、何がある。

『一番分かりやすいのは“ソディアック黄道帯十二星座”に関わるもの、ついで十二支でしょうか』

たまたま今回は誕生石だったという訳か……。

『ええ、察しているでしょうがそれらの力はその輪廻によって大きさが変わります』

つまり、それらが一緒くたになることも有り得るってことか。

『そうですね』

……今回は違つようでも何よりだ。

『ええ、あの世界でのISは色々な意味で恐ろしいですよ』

見たのか？

『全てではありません、なにせ現在進行形でありますから』

……どういふことだ。

『輪廻が廻る中で世界は分岐する、その分岐した世界の終焉までを私も悪魔は観ることが出来ます。そして階級にもよりますが多重

の世界に存在することも可能です』

お前の場合は？

『私は三つですが、輪廻に直接関与しているのはここだけです』

それは、お前が一番ここが面白いと思えたからでいいのか？

『ええ、そうですね』

分かった、それなら問題ない……いや、あると言えばあるが今は気にしないことにしよう。それよりも、早く着替えてラウラのところで夕食を待たなくては。

『貴方も本当に彼女が好きなんですね』

好きなものはしょうがない、って言うだろ。だから今は明日に備えて一時の楽しさを満喫するとしてようか。

### 第十三話 トーナメント初日、二日目（後書き）

諸事情により準決勝までの戦闘シーンは割愛しました。

この先が結構書きたかったものですから。

さて、次回はセシリア&篝ペアとの対戦です。

七月の誕生石であるルビーのBSSISが早くも登場します。

スペックデータを考慮しながら色々やっついていくと思いますが、どうぞよろしく願います。

## 第十四話 紅色の花片（前書き）

今回は試験的にラウラちゃんの一人称で始まります。

よさそうなら色んなキャラで試してみようと思いましたが、そのところはまだ不明ってことになります。

本編以降はいつも通りにヴァディム君にお願いしていますので。

それでは、どうぞ

## 第十四話 紅色の花片

「ラウラ、入っていいか」

「いいぞ」

夕食より少し早めの時間帯に、ヴァディムは私の部屋に遊びにきていた。本来ならそう安々と部屋に男を上げてはいけないと、クラリッサが言っていたが別にヴァディムなら問題ない。

寧ろ、二人でいれるので……いかんいかん、また考えてしまった。

「どうしたんだ、具合でも悪いのか？」

「い、いやっ、少々考え事をだな」

どうにも“あの人”とダブってしまう……、私を暴走の底から掬い上げてくれた人に。よく覚えていないが、少なくとも瞳が紅かったことは霧がかりながら記憶にある。

……一体どこにいるのだろうか、探して礼の一つや二つは申し上げたいんだが。

「そついえば、お前の左眼は紅かったな」

「ん、そうだけど」

一瞬だけ、まさかと思ってしまったがヴァディムはオッドアイだ。こつも綺麗な瞳を私が忘れるはずもないだろう。

「……いや、なんでもない」

「なんだよ、気になるな」

「お前には関係ないことだ」

「なんか手伝えることがあれば言ってくれ、俺達はパートナーなんだからな」

「それも明日までだろうが」

「……いけどな」

「何か言ったか？」

ぼそつと呟いたようだったが、上手く聞き取れなかった。

「いや、なんでもない。どうせならこのままタッグ結成したいとは思っているが」

「優勝できたら考えてやる」

嘘だ。優勝できなくなつて、私は共にいたいと思つ。

クラリツサにも聞いたが、ISと同じく男女の仲も連れだった時

間が長ければ長いほどに良いものとされるらしい。それならば、私はヴァデームといたくないわけがない。

「なら、この次の準決勝はなおさら負けるわけにはいかないな」

「最初からその気じゃなかったのか」

「分かってるじゃないか」

戦いにおいて、特に今回の大会についてはお前の考えるようなことは大体分かってしまう、というよりは私も負けたくない。イギリスやフランスの第三世代《ルーキー》や、ほんの数ヶ月乗り回しただけの奴らには負けたくない。

勝って、私は私であることを証明する。二度と力に溺れたりはない、戦うことで自分が保たれていることを実感する。戦うことでしか自分を実感することができないのなら。

#### 第十四話

〈紅色の花片〉

Side ヴァデーム

準決勝……。

それへのプレッシャーが皆無ではないが、一番大きいのは七月の誕生石のコアを用いられたB S I Sについてだ。様々なI Sの平均

スペックデータ、イズムルートスペックデータ、どれも比較対象にはなりえないからという理由で全くもってどうという機体なのか想像出来ない。

こんなことを言ってもしょうがないし、今俺がすべきことはそんなことではない。

「どうした。箸、というよりかスプーンが止まっているぞ」

「いや、なんでもない。明日の準決勝をちよつとな」

「準決勝……？」

「ああ、準決勝だ」

「何を恐れることがある、お前がペアなら負けはしない」

と言って、パンを一かじりするラウラ。……そうだな、考えすぎは良くない。それに今は折角ラウラと夕食を食べてるんだから、他のことを考えるのは野暮だろう。

それに、ラウラがああ言っている。俺はそれに少し甘えることにしようかね。

「明日のことは、今は忘れよう。さて、夕食だ」

「よつやくいつものヴァディムっぽくなったな」

「ありがとうよ、ラウラ」

「私はただ、戦う前から怖じけづくようなパートナーは要らなかつただけだ」

何も恐れることはない、俺には世界最速のイズムルートがある。速さは何にも変え難く、そして速さを制してこそ戦いを制することができる。

「明日もよろしくな」

「ああ、私からも頼む」

翌日。

「今日で学年別トーナメントも終わりかあ」

「楯無さん……」

準決勝のためにアリーナに向かっている途中で、生徒会長こと楯無さんと鉢合わせになった。

「七月の誕生石の子には注意してる？」  
ルビー

「ええ、勿論。出来る限り頑張ってみますよ、ラウラの為にも」

「いつもながら熱いわね」

「放っていて下さい、そして何の用ですか」

「いやはや、これは憶測なんだけどね」

その言葉を聞いた瞬間、俺の全身に電流がほとばしると勘違いする程に衝撃を受けた。

「馬鹿なっ、今はまだ機体は出来上がっていないはずじゃ……」

「だから、憶測でしかないの。多分二つBSISが並ぶ準決勝か、恐らくは……」

「“白式”も出てくる決勝か」

「あれは未だに全解析フルスキャンが終わってない機体の一つで、BSISに対抗できうる唯一のIS」

「バリア無効化攻撃の単一仕様能力ワン・オフ・アビリティ、零落白夜を扱えるIS」

「どちらにしろ、貴方が関わることには変わらない」

「……輪廻によって、ですか」

「誕生石に選ばれた人達は輪廻に導かれて出会う運命なのよ」

そう言い残して、その場を立ち去る楯無さん。

大丈夫、俺はやれる。

間もなくして、集合の呼び出しがかかったので俺はアリーナへと

急ぐ。

「悪い、遅れた……ってラウラ？」

ラウラはアリーナの方をずっと見つめていて、何も反応がない。  
ただの屍のようだ。

って、そんなネタはどうでもいい。何が起きてるんだ？

「どうしたんだ、何が……」

ラウラへと近づき、ついでにアリーナを見て俺は絶句した。

これを見て絶句しない人間はいないだろう……。

アリーナのご真ん中にぶっ刺さっているとつもなく大きなニンジンを見たらな……。

既にその周囲を先生達が囲んでいるが、多分あれは敵でも味方でもないだろう。

「やは、天才東さんだよ」

『お前は何をしているっ！』

その中身はやっぱり東博士で、すかさず織斑先生が激烈なツッコミを入れるが、いかんせん東博士には通じない。

「さてと……篝ちゃん、久しぶりだね」

「……」

「久しぶりの再会なのに、酷いな。まあ、私が悪いのだろうけどね」

「……そんな話はいい、私に“紅椿”を」

「うん」

そう言って空を指さすが、別に何も起こらない……が。

「これが第四世代IS“紅椿”だよっ」

「ファイティング初期設定とファーストシフト一次移行を」

こいつはヤバイ……。

「ヴァディム、あれは何だ」

「篠ノ之箒の専用機、紅椿だ」

「あの小娘にもか……」

「あれは俺がやる、第四世代ISだろうがなんだろうが知らないが、イズムルートの敵ではない」

「ヤ・ヴォール了解」

『それでは、両ペアは所定の位置について下さい。後三分で試合を開始します、繰り返します両ペアは……』

「さあ、自惚れたあのお嬢ちゃんに目にもものを見せようか」

……なあ、クロノーチエル。

『おや、最初からクライマックスなようですね』

どこの赤い桃太郎だよ、それ。まあいい……、そんなことより今はこの状況を一瞬で木端微塵にまで出来る速さを。

マジン  
ドゥヴァ  
トゥー  
一つ、二つ、三つ……。

さあ、始めようか。

全ては……一瞬だ。

「ようやく、リベンジマッチが出来ると思っていましたか……」

アリーナに降り立つと、セシリアが話しかける。

「どうやら、貴方には私は映ってないようですね」

「分かってるようだな、英国淑女さんよ……。さて、篠ノ之さんとやら、それを扱うことの覚悟はあるか？」

「覚悟？ 笑わせるな、この力があれば私は……」

やっぱりおかしい、篠ノ之が今までどんなやつだったかなんて俺

は知らないし、ましてやこの短い学園生活でほとんど見かけたこともない。

東博士の妹……、ただそれだけが俺の知る情報。その情報さえもこの戦いでは意味を成さない。

「覚悟もなく扱っていいほど、ISは甘いもんじゃない」

「知っているか、有史において正義は常に勝者についてまわること……。そしてその勝者になりうるのは私しかありえないことを」

「前者は知っているが、後者は知るはずもない。それに間違っている」

「その通りだな、勝つのは私達だ」

相手は二人とも専用機、つまるところハンデルールは適用されない。それは相手も一緒だが、セシリアにラウラが勝つことはほぼ確定済みだ。セシリアが強大なるレベルアップしてなければ、の話だが。あの様子じゃ、そこまでレベルアップしていなさそうだ。

つまり、勝負は俺と篠ノ之エメラルド五月の誕生石と七月の誕生石の戦いにかかっている。……何人も辿り着けない速さ、それがあの未知の機体にどれだけ通じるか。

「ラウラ、この試合で“アレ”のお披露目だ」

「いいんだな、こんなに観衆があるとすれば間違いなくバレるぞ、お前の能力が」

「問題ない、既にイズムルートは音速を超えられる。瞬時に発動したと誤認させられるには、この仮染めの真実だけで十分だ」

『五……』

カウントダウンが始まる。

『四……』

それに合わせ、開始から猛攻を与えられるようにスラスターを判定ギリギリまで吹かす。

『三……』

全てが一瞬にして終わる。

『二……』

そんなイメージを頭に刻む、今まで何回も何百回もイズムルートに乗って加速してきたイメージを頭に刻む。

『一……。それでは始め』

トゥリー・セクエンダ  
三秒ルールっ！

それは人類で最大の禁忌とも言える行為。たった三秒だけだが、世界の全ては進むことを止める。いや、俺によって止めざるをえなくなる。俺が望む一瞬への演出をすることをやむを得なくする、その演出は俺が音速を超えるにはあまりにも美しすぎる。

その三秒　百八十の刹那の中で俺は加速し、尚且つアドヴァンテージをしっかりとって攻撃に移る。

音速を超えた世界、それが俺の望みであり、真骨頂だ。速さは何よりも変え難い、速い者はそれだけ攻撃するチャンスがある、それだけ回避するチャンスを見いだせる。

速さ、というアドヴァンテージ。

それさえ手に入れるだけ、それだけで俺は負けない。

一秒足らずで紅椿の背後に周り、そのままツインダガーを展開しながら音速で回転を始める。

「全ては、一瞬だ」

三秒ルール適用時間が過ぎた時点で、俺の回転スピードは音速を超えている。

「なっ……」

「いつの間にか……」

瞬時に判断して回避行動をとる……がいかんせん遅すぎる。

「それが東博士の最新作……、笑わせる。機体が良くても操縦者がこれじゃあな！」

「五月蠅いっ！　私を馬鹿に……」

篠ノ之が回避した先には、勿論ラウラがいる。つまり、この時点で既に篠ノ之は罠に嵌まっている。

「私がいることを忘れないで下さいよ」

「忘れるはずもない、英国淑女さんよ」

「……シールドエネルギーが既に300を切っていましたっ!?」  
どうやら気がついたみたいだった、動転しているのか口調が結構おかしいが。

あの回転攻撃は、篠ノ之を奇襲する為だけではなかった。寧ろそれだけが目的ならばもっと威力の高い攻撃を生み出していた、だが俺はあえてそれをしなかった。

セシリアが動転している隙、篠ノ之が固まっている隙を俺が逃さずはずがない。止まった標的を俺が貫けないはずもないし、一直線なら尚更だ。バリア無力化攻撃にも勝らずとも劣らない攻撃、それが“リジウム・ラスー音速居合”

「全ては、一瞬だ」

音速を超える物体が持つ力学的エネルギーは凄まじい、それにより得たエネルギーを全て一瞬の一撃に費やす。それは相手のシールドエネルギーをかなり削り取る……はずだった。

「……それで終わったつもりなのか？」

「馬鹿なっ、確かにシールドエネルギーは……」

「けんらんまじゆ 絢爛舞踏”……紅椿の単一仕様能力で、エネルギーを増幅することが可能だ」

「っ、ラウラはAICを解いて即刻セシリアと対峙してくれ！」

「ヤ・ウオール 了解……負けるなよ」

ラウラがセシリアと対峙するまで、篠ノ之はなにも行わなかった。……まるで、ラウラを弱い者かのように哀れみの視線で見つめながら。

俺にはそれが無性に許せなかった、ラウラを見下したことを俺は絶対に許すことが出来なかった。出来るはずがなかった。

「どろした、かかってこい」

「……ああ、第二ラウンドだ」

絢爛舞踏が発動する一瞬、その瞬間だけが俺がこの紅椿に勝つための手段とも言えるだろう。

だが、一瞬は一瞬。

狙う時が決まったただけでも俺にとっては利点、勝機があるならそこに全力を注ぐのが戦いというものだろう。

三秒ルールは一日七回まで、つまり後六回使えるが……なんせこの後は決勝戦があるし、敵の襲来に備えても三回は残しておきたい。

つまり、後三回だけ。

この三秒×三回をどう扱うかが俺の勝利、ひいては決勝戦へと繋がる。

ならば……。

「御手並み拝見といこうかつ！」

「速いだけの小僧が、私に盾突くなっ！」

覚悟がある奴とない奴の違い、ここに見せてやるよっ！

## 第十四話 紅色の花片（後書き）

いかがだったでしょうか。

現段階で一番長い文章になりました、それでも10KB（PC備え付けのメモ帳で換算）ですが。

紅椿、最初からかなり強めに設定しました。そしてなんかちょっと違う感じがする筈……。まあ私がそうしたんですけどね（笑）

次回もこのまま対紅椿戦です。

第十五話 翠玉と紅玉（前書き）

アバン部分ではラウラちゃんVSセシリアですが、本編はがつつりヴァデイルム君VS箒となっております。

それでは、どうぞ

## 第十五話 翠玉と紅玉

「どうした、やけに驚いた顔をしてるじゃないか」

本能的にあの紅椿とかいうISは普通と違うと感じ、適任だと思われるヴァデームに任せることに。

とりあえず、ヴァデームが後で戦い辛くなる前にこのイギリスの貴族を気取ってるようなこの小娘を落とさなければならぬ。

「……少々、彼を侮っていたようでしたわ」

「侮れる程の強さを持っていないのに言えたものだな」

ヴァデームは言っていた、力を使うべきに使うべきだけ使うこと……それが強さだと。つまりそれは常に自分を制御出来ているからこそ望める強さであり、今よりもっともっと強大な強さをヴァデームは秘めているはずだ。

ならば、それを信じて私はヴァデームが安心出来るように小娘をたたき落とす。

「その言葉、そっくりそのまま返してあげましてよっ！」

ビット兵器“フル・ティアーズ青い雫”、今までの私ならば相性が悪い武器だ。……だが今は違う、私は弱点を克服した。

「……っ、何故動きませんの」

「当然だ、私の前では何人も行動することは許されない」

散開されるはずだった青い零六機、そして小娘自身に対して停止結界を発動。以前ならばこんな芸当はしなかったし、出来なかった。

一対一での戦闘は叩き込まれたが一対多を想定した戦闘はあまりやってなかった故に、無理もないといえそうなる。だがしかし、一対一だけに特化しても意味がないことも多々ある。

何に対しても戦えるような、そんな抑止力へなりうるような力……。それが私の求める力であり、強さの源の一つ。

「ちょうどいい具合に、レールカノンもチャージ済みだ」

このまま撃ち抜けば、私の勝ちはほとんどゆるぎないだろう。

「……私の、負けですわ」

「ならばISの展開を解き、とつとつ安全地域セーフティゾーンに向かうことだ」

「次は負けませんわ」

ヴァディムがシールドエネルギーを削らなくても、勝てたように見えたが実際はヴァディムが攻撃しているのといないのでは私の勝率も変わってくる。

残りシールドエネルギーがそこそこあれば、ここから先をどうにかして切り抜けようとする考えが浮かばないこともないはずだ。だが、シールドエネルギーが少ないことでその考えを却下させる。

さて……。随分と戦い慣れしているようだが、今回は難しいんじゃないのか？ ヴァディム。

## 第十五話

く翠玉と紅玉く

### Side ヴァディム

「御手並み拝見といこうかつ！」

「速いだけの小僧が、私に盾突くなっ！」

覚悟がある奴とない奴の違い、ここに見せてやるよっ！

まずは加速。これがないと俺の戦闘スタイルは始まらない。数メートルだけ後退して、そこから直上へ<sup>イグニッション・ブースト</sup>瞬時加速を行い加速する。

大体アリーナの解放屋根を超えたあたりで、一度止まる。相手の出方を伺ってみるが、篠ノ之は何のアクションも起こさない。

それどころか、俺を誘っているかのような表情を浮かべている。ナメやがって……。ならば教えてやるうじゃないか。

<sup>リジウム・コア</sup>

音速居合。その一撃に全ての加速分のエネルギーを転化していた

が、今回で一撃じゃ倒せない相手もいることが分かったのは幸いだろっか。

俺のシールドエネルギーはまだ三分の二以上残っている、まだまだ瞬間加速イクレッション・ブーストに使える分はあるから問題ない。

一撃で倒せないならば、二閃すればいいわけだ。まだ構想段階で全く試してなかったが、いきなり実践で使ってみるのも悪くはないと今の状況なら思える、普段ならすっかりデータをとって確実な状況下で繰り出すのがベストなんだが……。

だが、そんな戯言を言っている暇はない。今篠ノ之を正しておくないとこれからが大変なことになる、彼女にとっても、俺にとっても。

「これだけの距離があれば、瞬間加速を使わなくても十分に加速出来るさ」

俺は一気に急降下を始めるが、紅椿には直接向かわない。大体地上五十メートル辺りから旋回を始め、アリーナ中を飛び回る。その飛び回る中でも、加速できる範囲ギリギリまでは加速する。

「私には、見える」

紅椿がついにアクションを見せて、こっちに向かってくる。両手に日本刀を持ち、こちらに向かう姿はその機体のカラーリングとも相まってその形相はまるで鬼を錯覚させるようだった。

だが、所詮錯覚は錯覚。根っこからの強さとは違う。

「寝言は寝てから言うんだな。お前が“見えて”いるんじゃない、俺が“見せてやって”いるんだ」

軽く瞬時加速をすれば、紅椿の死角には楽々と踏み込める。いくらハイパーセンサーだろうが、それを扱うのは当然人間だ。

「ふん、それなら私に見えない程動いてみるがいい」

だが、あえてまだ動かない。

「折角ハンデなしで戦うんだ、楽しむくらい……いいだろ」

あの単一仕様能力、何かひっかかる部分がある。確信はしていないが、もしかしたら勝機に繋がる可能性もありうる。

「そんな暇があるならな」

そして対峙しようとするさらに近づく篠ノ之、それに立ち向かうことはせずに二丁拳銃で牽制しながらある程度の距離をとる。

「さっきまでの威勢はどうした？」

ほざけ、こつちだって意味なく動き回っているわけじゃない。その日本刀に見えるその刀、その真相がもう少しで……出てきたっ。

左手に持つのは“雨月”、打突に合わせてエネルギー刃を放出することが可能。右手に持つのは“空裂”、斬撃に合わせて帯状にエネルギー刃を放つ……。って、これ二つだけでどれだけの範囲で戦えるんだよ。

幸いなことに、篠ノ之はまだ紅椿のスペックに酔いしれている。

「そんな豆鉄砲では、いつまでたつても終わらない」

その証拠として、篠ノ之は絢爛舞踏を常時発動させながら加速を続けている。……まだ気がついていないようだ、その単一仕様能力ワン・オフ・アビリティの落とし穴に。

「お前に遊ぶ暇があるのか？」

右手の空裂で斬撃からのエネルギー刃を繰り出す篠ノ之、だがその刃はあたることはない。いくら篠ノ之が剣道をしていたとはいえ、ISを用いた三次元での戦いならこちらの方に歩がある。

「遅い……遅すぎる」

「黙れっ、逃げてばかりいずにこっちにきて戦うがいいっ！」

「お望み通り……、戦ってやるよっ！」

勝機はまだある。

いくら東博士の最高傑作（かどうかは分からないが、少なくとも現行ISよりは高スペックを誇るはず）でも、最速のBSISであるイズムルートの速さにはついてこれない。

ならば、その機動力を駆使しないわけにはいかない。それにこの勝機は俺とラウラだから掴める、既にラウラはセシリアを降伏させているのでその辺りは問題ない。

『ヴァデウム、こちらは終わったが加戦は？』

プライベートチャンネルにてラウラと会話をする、それで篠ノ之にばれずに離れての会話が可能だ。

二丁拳銃で牽制しながら、ラウラに応答する。

『遠距離から狙撃を頼む、なるべく俺は対象から離れて戦うが接近戦の時でも撃ってきて構わない』

『了解、ではチャージに入る』

ラウラがチャージしている間は、狙撃される心配はない。生憎篠ノ之はこっちに集中しているのでこっちとしてはかなり好都合だ。

「“翡翠”、さらに“凍える風”」ガエーツェリオ・リョートウ

右手に翡翠を、左手にツインダガー二つを重ね合わせた合成剣を。目には目を、二刀流には二刀流を。それにあんな拙い二刀流とは違う、俺はツインダガーで二刀流には多少慣れているからな。

「一撃でダメなら、二閃だっ」

「無駄だ、私のエネルギーは無尽蔵……。止めたければ白式の“零落白夜”でも用意するんだなっ」

篠ノ之が振り回す雨月と空裂のエネルギー刃を全て避けながら進み、逆に近づいて斬撃戦に持ち込む。

「いくらエネルギーが無尽蔵だからといっても、それだけ単一仕様能力を発揮したままだとそろそろ集中力も途切れるんじゃないか」

「馬鹿にするなっ、私に集中力がないとでも？」

あくまで絢爛舞踏を発動しながら戦うスタイルは変えないらしい、だがそれでいい。その絢爛舞踏の常時発動及び長期連続発動には膨大なリスクを伴い、それが訪れる時がくれば俺達の勝利は確定したようなものだ。

だから、その時《一瞬》が訪れるまで俺達はジリ貧な戦いを続ける。負けると見越して相手の戦力を少しでも削ろうとするそれとは違い、勝つための工作を隠す為の戦い。

脳ある鷹は爪を隠す……、まさにその言葉が今の俺達には相応しい。

隙を見つけては攻撃を打ち込み、敵の攻撃は受け流したり避けたりして最小限のダメージで済ませる。相手は絢爛舞踏でシールドエネルギーを気にしなくていいのでガンガンに攻撃してくるが、それはそれでこっちも都合だ。

拙い動きには隙を見つけやすいので、攻撃を打ち込みやすい。それに篠ノ之は紅椿のスペックを最大限生かされてないし、その上その紅椿のスペックに酔いしれている。絢爛舞踏による、半永久エネルギーがその心の余裕を生み出す。

『待たせた、いつでも狙撃可能だ』

『了解、ならポイント座標を……アリーナ中央とする。標的をおびき出すので狙撃を頼んだ』

『了解』

まずは攻撃範囲から離れ、二丁拳銃により威嚇射撃を行いながら篠ノ之をアリーナ中央まで誘導する。

「ちよこまかとっ！」

篠ノ之のような性格の相手なら、自分がもっていきたい状況下へ持ち込むことは簡単だ。多少怒りを煽って冷静な判断をさせなければいいだけ、その冷静さを欠かすことで見えることも見えなくなる。

常に先手をとる、それこそが戦いにおいて重要なことの一つである。そしてその他に重要なことももう一つ。

「ふん、そんな真ん中で不細工な姿を晒すがいい」

「……残念、それは君の方だ」

相手の裏をかくことだ。

『ファイア  
放射っ！』

ラウラの合図と同時に、瞬時加速を行い後ろに移動。それによって最大出力のレールカノンから逃れる。

辺りは土煙によって黙視できないが、ハイパーセンサーによってまだ紅椿が稼動状態にあるのは分かる。

『ラウラ、次は俺に加戦してくれ。停止結界を用いての、現段階で出来る限りの全弾放射<sup>フルバースト</sup>をする』

『何か作戦があるみたいだな』

ラウラが俺のところ降り立つのと、土煙から紅椿が出てくるのはほぼ同時だった。

「無駄、私に対しての全ての攻撃は……」

「ラウラっ!」

「分かっている」

ラウラが右手を前に突き出す、それによって停止結界ことA I Cは発動して紅椿の動きは一切止まる。紅椿に対して停止結界が有効かどうかは、最初の奇襲で分かっている。

「無駄だ、それでは絢爛舞踏は打ち碎けない」

「そんなことは分かっている……だが」

俺は灰色の嵐、ラウラはスイーティー・フリーヤレルカノンを構えて全弾放射の体制をとって直ぐさま攻撃に移る。

……が、その結果は虚しく。

「どっした、もう終わりか？」

絢爛舞踏の前には全てが無に帰した。ダメージは直ぐさま絢爛舞踏によって修復され、結局のところは自分達の残弾を浪費するだけ

だった。

「ラウラ、そのまま頼む」

だが、それも布石でしかない。次の攻撃が真打ち、つまり今までののは全て演出って訳だ。

「アレは一度通じなかったが……やるのか」

「ああ、勝機があるならな」

音速居合、それを二度行う……いや一度斬った後に返しの一撃を加わると言った方がわかりやすいだろう。

幸い、まだシールドエネルギーは半分を切ったばかりだ。だから、こっちだってまだまだ出来ることはある。

「まずは……お披露目だっ」

連続瞬時加速で、瞬間的に音速を超える。ラウラがタイミングを誤ればこの攻撃は逆に俺を陥れることになるが、そんなことをラウラがするはずがない。

というよりかは、俺が連続瞬時加速を行った後すぐにラウラは停止結界を解いている……右手を突き出したままで。篠ノ之他多くの人間はラウラが“右手を突き出す間”が停止結界の有効である証拠だと思いきや、実際はラウラが“意識するかしないか”で停止結界は有効か無効かが変わる。

つまり“右手を突き出しておきながら停止結界は発動していない

”という状況が発生する。

篠ノ之はそれに気がついていない、故に動こうとしない。彼女が動かないのは多分紅椿や絢爛舞踏がある、という認識がもう既に無意識下まであるからだとも言える。

「リジウム・ラスー  
音速居合……」

いつも通り、加速によるエネルギー分を全て一撃にかける。いつもと違うのは、攻撃がそれで終わりじゃないこと。

「ミエーチ・ヴァズブラッシャー  
刀返しっ!」

音速居合で切り掛かった後、直ぐさまその刀を返してもう一度切り掛かる。一撃目よりは威力は劣るが、それでも通常の斬撃よりは高い攻撃力を誇る。

「まさか、それで終わりではないよな」

これでさえも絢爛舞踏の無尽蔵のエネルギーの前では意味をなさなかった。

「……くっ、まだこないのか」

だが、あの“無尽蔵”のエネルギーは“無限”のエネルギーではない、つまり弱点がある。そしてその弱点は俺の推測が正しければ、二つ有り得た。一つはもう既に策尽きてしまった（二段階のダメージを与えても与えたそばから回復してしまうことが発覚）が、もう一つの方は上手くいくはずだ。

それが“無限”ではなく“無尽蔵”であることでの、弱点。例えるなら、携帯電話とかがあげられるだろうか。充電しながら使っていればバッテリー切れになんてならないが、その代わりとしてバッテリーの寿命がかなり短くなる。

「何を言ってる……な、なんだとっ？」

単一仕様能力発動中にあつたオーラみたいなものが消え、さらに篠ノ之の様子も少しばかりおかしい。

「ヴァデイルム、まさか……」

勝機が、訪れた。

「ああ、これを待っていた。具体維持限界を」リミット・タウン

第十五話 翠玉と紅玉（後書き）

いかがだったでしょうか。

原作よりかなりめっちゃくちゃな紅椿を扱っただけですが、これには色々理由がありました……。。

一応次回で明かされる予定ですので、とりあえず第ファンの皆様にご覧を。

## 第十六話 嵐の前の静けさ

「馬鹿な……、何故発動しないっ！」

「ワン・オフ・アヒリティー単一仕様能力に頼りすぎた結果だ、紅椿はもう既にリミット・ダウン具体維持限界……。つまりもうそれには頼れないってことだ」

本来ならば、エネルギー不足に陥ったときに発動するそれは今回に限りエネルギー過剰補充によって発動した。簡単にいえば、お腹がいっぱいなのに、まだまだ食べようとして結局苦しい思いをする……そんなところか。

「アドミニクラシチャ終了の知らせ……降伏しろ」

翡翠を喉元へ突き立てて、そう告げる。

「私は……、私は負けられないんだっ！」

そう言つて、雨月と空裂を構えた。もう既にエネルギー刃は出ることではなく、もう恐れることは何もない。

『そこまでだ、勝者は日崎、ボーデヴィツヒペアとする』

と、そこで織斑先生のアナウンスが入り、俺は翡翠を鞘に納めてそのままイズムルートを解く。それに続いて篠ノ之とラウラもそれぞれISを解く。

「篠ノ之……後で話がある」

「……」

俺の言葉に返事すらせずに、黙って踵を返して歩いていく篠ノ之。その後ろ姿に、何かどす黒いものが消えたのを感じた瞬間に篠ノ之はその場に倒れこんだ。

「篠ノ之っ!」

すぐに駆け寄って、呼吸や脈があるかどうかを確認（言うておくが、疚しいことは一切ない）しておいたが、ただ単に気を失っているようだった。

その後は医務員に連れられて、医務室に行った。俺はそれを見送るついでに一夏やセシリアがいるであろうピットに向かい、話を聞くことにした。

## 第十六話

〜嵐の前の静けさ〜

「一夏、それとセシリア。篠ノ之はいつもあんな感じなのか」

「いや、俺が知っている筈はもっと冷静に物事を判断できていたはずだ」

「……篠ノ之さんはこの一週間ほど浮ついていましたわ」

「一週間前っていうと……箒が俺の部屋に遊びにきて『私が優勝したら付き合っしてほしい』とか言ってたな、別に買い物ぐらいいつでも付き合うのに」

多分一夏の解釈は間違ってるが、それは今置いて。

「浮ついていた？」

「はい、今思い返して見ますと多分紅椿が手に入れれるからだったかもしれない……ですが、あんな風になったのはトーナメントが始まってからですわ」

セシリアの話によると、開会式前に箒は誰かと会って色々と話をした後からなんか少しおかしくなってしまった、らしい。

「その相手の特長とかは分からないか？」

「えっと……、私達と同年齢位の女性でツインテールを黄色いリボンで留めていましたわ。顔立ちからしてアジア圏の人だとは思いますが」

「まさか……、いや、違うか」

「何かひっかかるのか？」

「中学ん時に似たような友達、というか幼なじみがいたんだ。だがその友達は今中国にいる」

「あの人……確か去り際に『再見<sup>サイジンエン</sup>』って言ってましたわ」

中国語で『さようなら』を意味し、そして『また会いましょう』とも意味する。つまり、篠ノ之に会っていたとされる人物は中国人かも知しくは長らく中国に住んでいたことがある（現在も住んでいる）、という人がソートされる。

さらに、一夏がいう中学での幼なじみが一番怪しいところだが。

「というか、幼なじみは篠ノ之じゃないのか」

「箒はファースト幼なじみで、鈴……あ、もう片方はセカンド幼なじみだ」

幼なじみにファーストもセカンドもあるか？ と思ったが、一夏が考えることは若干分らない時があるから、今回もあんまり考えこまないことにおこう。

「その怪しい奴と会話した後、篠ノ之はああなった……それでいいのか」

「はい、そうですわ」

考えれることは三つ、一つ目は篠ノ之がその怪しい奴に洗脳をかけられた可能性、二つ目は篠ノ之の深層心理の爆発、三つ目は悪魔と契約したかどうか……。

『少なくとも、三つ目はありえませんが』

クロノーチエル、何故分かる。

『私が悪魔ですから。彼女から察知できる気配に悪魔はいませんで

した』

そうか、分かった。ならばあの二つだが……多分前者だろう、相手の組織も大体予想できる。楯無さんから注意を受けてはいたが、まさかアクションを既に起こしていたとは。

これならば、一回戦から篠ノ之の様子をチェックしておくべきだった。今更言ってもしかたがないが……。

「とりあえず、篠ノ之には目が覚めてから話を聞くことにしよう」

「あれ、どっか行くのかヴァン」

「博士に会いに行かなきゃな」

「来ると思ってたから、もういるよ〜」

それは手間が省けて楽だ。

「質問があります」

「どうぞ〜、この束さんになんでも聞いてよ」

「紅椿に制御装置リミッターを何故つけなかったのです」

「あはっ、アレにも制御装置はついてるよ。ただ、制限は君のより緩いけどねえ……流石は翠玉イスマルト・フスブイシカの閃光」

「茶化さないで下さい、あれには強大な力が眠ってるんですよ」

「知ってるよ、そして今回篝ちゃんをあんな目にあわせてしまった要因として……私も含まれてるんだから」

「っ、何を言ってるんですか束さん」

「……話してもいいのかな」

「いいんじゃないでしょうか、だが……セシリア。少しの間席を外してほしい、ついでに織斑先生を」

この話を部外者に漏らすのはどう考えてもまずい、世界が関わっている話を……。

「……よほど重要なんですネ、分かりました」

「すまない、セシリア」

「気にしないでくださいまし」

セシリアが去っていくのを見送ってから、博士に盗撮と盗聴のチェックを行ってもらい安全を確認する。それが終わる頃に丁度織斑先生が来て、話が始まる。

「博士、説明を」

「ちーちゃんにはともかく、いつくんには誕生石のコアの話からだね」

「いや、いい。B S I Sに関する基礎知識はこいつに叩き込んでおいた」

「あその後で、ですか」

織斑先生と話をした時が思い浮かぶ、確かに俺はあの時に先生に篠ノ之のことや一夏についても話した。

「B S I S、確か誕生石のコアを用いたI Sのことを指す……であつてるよな」

「ああ、そして篠ノ之が乗っている“紅椿”、俺が乗っている“翠<sup>イス</sup>玉の閃光”はそれぞれB S I Sだ」  
ムルト・フスツインシカ

「そんな……、嘘だろ。あれって軍用I Sよりもかなり強大な力があるんじゃないのか」

「本当だ、織斑先生からどれだけ聞いたのかは知らんがこのB S I Sってのは色々と厄介事を運び込むらしくて。それにプラスして白式……」

「それは私から。いつくん、覚悟していてね」

「……はい」

「白式はB S I Sに対抗出来る可能性のあるI Sで、言うならば抑止力とも言えるI Sなんだ。だからこれからも色々巻き込まれるかもしれない」

「……箒やヴァンはこの運命から逃げられないのに、俺が指をくわえて見ているだけなんて嫌だ。力があるなら尚更」

そう一夏が言うと、織斑先生は少しだけ怪訝そうな顔をした。

「一夏、お前はそれでいいんだな」

そりゃそうだろう、家族が戦争に巻き込まれるなんて誰も望んじやいない。

「千冬姉、俺は大切なもんを守りたい。白式がそのための力なら、俺はそれを使う」

「それがお前の覚悟か、一夏」

「ああ、ヴァン」

「……甘ったるい、そんな考えでは守れるもんも守れやしねえ。大切なもんはな、失ってから初めて気がつくもんなだよっ！」

かつて俺はラウラの笑顔を失ってしまった、だが今ではまた微笑んでくれるラウラがいる。それがどれだけ幸せなことかが、今の俺なら分かる。

そんな気持ちを含めて、俺はさらに一夏に問い掛ける。

「お前には、それを守りたいという覚悟があるのか、それを守るだけの力があるのか」

「覚悟ならある、だが……まだ俺は弱いさ」

「ああ、確かにお前はまだ白式を使いこなせていない、それにまだまだ考えが甘ったるい」

「なら……」

「命に換えてでも、守りたいと思ってみせる」

それだけの覚悟も出来ないような奴が、守るだなんて言うな。

「……見せてやる、俺の覚悟を」

「そうか……。なら、決勝で待つ」

「ああ」

残りの説明は博士と先生に頼んで、俺は自室に向かった。……戦争に関する話は、俺は嫌いだ。

いずれは立ち向かわざるを得ない運命だけれども、俺にはまだそれを生き抜くだけの強さはない。まだまだ強くならなきゃいけない大切な人を……。ラウラを守るためにも、一度は失ったが、それをなかつたことにしようとしていた過去の自分には吐き気がするが、何を言っても過去には戻れない。

なら、俺がすべきことは前に進むことだ。

S i d e    ラウラ

愛機であるシュヴァルツェア・レーゲンのチェックを行いながら、私は先ほどの試合を思い出していた。

……ヴァデームに頼り過ぎた部分が幾つかある、それに私より策士だ。教官に教えてもらったことに、仲間を信じることというのがあった。あの当時の私にはまったく分からなかったが、今なら分かる。

『隊長、連絡があります。お時間はよろしいでしょうか』

「クラリツサか、構わない。続ける」

今思えば、クラリツサだってシュヴァルツェア・ハーゼの隊員達だって、仲間なのに。私は冷たく接してしまった。

『はい、レーゲンの新武装がそろそろそちらに届く予定です。データ圧縮されてますので、受けとったら量子変換インスタールを行って下さい。なお、今から新武装のスペックを送りますので、暫しお待ちを』

それでも、こんな私を慕ってくれる仲間がいる。

「ヤ・ヴォール  
了解」

そこで通信が終わったので、私はシュヴァルツェア・レーゲンを見つめる。……新しい武装が手に入れば、戦略も広がる。それらを考慮した後でまた決勝に臨めばいい。まだもう少しデータが届くまで時間はあるからな。

ならば、少しヴァデームに会いに行くのもいいだろう。そうとなれば、善は急げ……急いで支度してヴァデームと決勝について作戦を練るのもいいだろう。

そう思って、制服に着替えてからヴァデームと連絡をとることにした。

『ん、ラウラか。どうした』

「新しい武装がそろそろ届くらしくてな、次の決勝に向けて作戦を練ろうかと思ったんだ」

『丁度いい、俺もラウラに伝えたいことがあったんだ。今からそっちに向かうよ、後三分くらいで着く』

「あ、ああ。分かった」

伝えたい、こと……か。

もしかしたら『お前は俺の嫁だっ』とか言われてしまうのか？  
クラリツサが言っていたが好きで異性にはそういう習わしが日本にはあると聞いた、ならば日本の血を半分引き継いでいるヴァデームならばありえないことではない。

いやいや、待て。まだそうと決まった訳じゃない、もしかしたらヴァデームは私のことなどはただのパートナーとしか見ていないのかもしれないし……。

自分で思っておきながら、激しく自己嫌悪だ。

『ラウラ、着いたぞ』

「……勝手に入ってくれ」

「あ、ああ……って、何かあったのか？」

「気にしないでくれ、私だって女の子なのだ」

「いや、別にラウラのことは女の子だと思ってるぞ」

「本当かつ!」

「そんなに驚くことじゃないだろ」

「私には重要なんだ」

「……もしかして、ラウラってああ言っておきながら一夏のこと好きだったりする?」

「何を馬鹿なことを言うかつ!」

「はは、冗談だ。とっとと作戦を始めようか」

絶対今顔が真っ赤だ、それも全部ヴァディムのせいだ。私をこんなに苦しめて……、だがなんだがヴァディムといると暖かい気持ちになる。

知っている、これが恋なんだと。私には無縁なものだった、恋。……私に持っていないものを、ヴァディムは沢山持っている。今まで出会った誰よりも、私はヴァディムに惹かれている。

「……なあ、ヴァディム」

「どづした?」

「一体何度考えただろうか、たった一言『好きだ』と言うことさえ、躊躇ってしまう。今の関係より先に進みたいけれども、今の関係を壊したくない。」

「いや、なんでもない。もうそろそろ我が隊から新武装に関するデータが送られてくる頃だ」

机の上に置いてある軍から支給されたノートパソコンの電源を入れ、メールチェックすると目的のデータは一番上に来ていた。

「これが、新武装か」

それは二つあり、一つ目はMP7を機軸にしているような短機関銃で、普通の装填数の十倍を誇るドラム式の機関銃だった。

もう一つは『シュヴァルツェア・レーゲン黒い雨』、上空に黒い雲を発生させてそこから無数のレーザーを放つ。

「もう自由電子レーザーが実用化されてるのか……」

「自由電子レーザー？」

「ああ、簡単に言えば自由電子を相対論的な速度まで加速させて適する処置をする、すると自由電子は特別な光を発するんだ。それを電子ビームと相互作用させまくって、レーザー発振を行うんだ。それが自由電子レーザーになる」

「……いや、さっぱり分からないが、とりあえずなんか凄いことは分かった」

「凄いつてもんじゃないさ、自由電子レーザーって兵器実用出来るほどまだ確信持てる訳じゃないのに、こうやって今兵器になってるんだ」

「……なんか、楽しそうだな」

「ああ、ゴメン。父さんの影響で色々と科学的な勉強は沢山したからな」

話を聞くと、あの相対性理論を八歳の時には読んでいたらしい。

……実は隠れた天才なのか、ヴァディムは。

「楽しみだな……」

自分が使う訳でもないのに、なんだがとても楽しそうだ。そんなヴァディムは幼い子供のように瞳が輝いていて、見ている私も自然に微笑んでしまう。

「ほら、ヴァディム。昼食の時間だ」

「もうこんな時間か、まだドイツ軍からは連絡こなさそうだし食堂行くか」

ちなみに、ヴァディムの昼食はカツカレーだった。

第十六話 嵐の前の静けさ（後書き）

いかがだったでしょうか。

今回は閑話休題というかちょっと小ネタ系っぽくなってしまいました。  
た。

次回からはまたシリアスっぽくしなくちやなと思いつつ。

## 第十七話 好戦的な中国人

そろそろトーナメントが始まる。

一夏にも宣言してしまったし、私は負けるわけにはいかない。そのため代表候補生であるセシリアにも協力を仰いだし、紅椿もそろそろ届く頃だ。

「そこにあんた」

控え室での準備を終え、一回戦に向かおうとしていた私は黄色いリボンで髪をツインテールに留めた少女に声をかけられた。

「一体誰だ？」

「私の名前は鳳鈴音、フマゼンイン中国の元代表候補生で今はとある組織で働いてる」

「代表候補生だったのに、わざわざ違う道を選んだのか？」

代表候補生になると色々待遇されると聞く、それにその国では英雄扱いだとも聞く。

「選ばれちゃったからね誕生石のコアから」

「それは機密事項では……」

「知ってるんだ、へえ……」

しまった、自分で墓穴を掘ってしまった。

「い、いや。私はなにも知らないぞ」

「遅いよ」

訳の分からないうちに、それは始まった。

「あんたはもう、輪廻からは逃れられない」

「……創造神の名に集まりし、六つの神」

「物分りがいいね、助かるよ。って私が使命を果たしたただけなんだけどね」

「……」

「それにしても、わざわざこんなことしなくても、私が全部破壊してやるのに……。まあ、いっか。えと、七月の誕生石ルビーの適合者さんだっけ。再見サインエン」

「また……」

私は、勝つ。

何者にも、何事にも。そう決まっているから、そう決められているから。

全ては、創造神の仰せのままに。

## 第十七話

〈好戦的な中国人〉

Side 一夏

箒の意識が戻ったと聞き、すぐさま箒の元にかけた。

「箒っ、無事か」

「……一夏」

顔色は悪くないし、声色もいつもの箒だ。

「見たところ、無事なようで良かった」

「……私は、何をしていたんだ」

「覚えてないのか？」

「一回戦の前に、凰という奴に会ってだな……」

「そいつから何かされたのかっ」

まさかと思っていたが、本当に鈴がやったのか？

だってあの鈴がだ、俺の知る鈴はまずこんなことしないし、ISのことなんてこれっぽっちも知らないはずの鈴がだ。この学園に用があるはずなんてない。

「洗脳、されていたようだ。嵐に何かをされた瞬間、私は感<sup>見て</sup>じてしまった。輪廻というものを……」

「そんな……」

俺は薄々は気づいていた、だが理解しようとしなかった。現実を拒否したかった、その現実を見たくなかった。

だってそうだろ誕生石のコアに選ばれた人たちは必ず“輪廻”によって導かれると聞く、それも破滅が存続かを賭けて戦うとも聞く。

その輪廻には俺はねじ込むことが出来るが、まきこまれることになってしまった鈴とも戦わなくてはいけない……。この真実がどれほど残酷か、考えなくても分かる。

「一夏……私は、戦う」

「っ、箒」

「私は、それが運命ならば逃げたくはない。もう私はあの頃の私じゃない、今の私には紅椿もある。今から積み重ねていけばまだ間に合うはずだ」

箒は輪廻に巻き込まれていようといまいと、多分変わらない。箒が箒であるから、きっと何かのために戦いたいと思っているはずだ。

「……俺も戦うさ、大切なものを守るために」

そつだ、俺は大切な誰かを、大切なものを守るために戦うと決めたんだ。ならば、幼なじみである鈴だつて助ける、篝や千冬姉も他の皆も全部助けられるほどに強くなる。

その覚悟が、今の俺にはある。

見せてやるさ、ヴァディム……。この戦いから、俺は始まる。

S i d e ヴァディム

「ラウラ、調子はどうだ」

「問題ない、寧ろ絶好調だ」

昼食を終え、ドイツ軍からの新武装を量子変換させ終えたラウラと共に、空いているアリーナ（今日は一つのアリーナで各学年の準決勝と決勝を行うので空いていた）を借りて試射を行っている。

短機関銃の性能はもちろんのこと、黒い雨もかなりの汎用性がある。さすがは、自由電子レーザーといったところか。いや、この場合はドイツ軍の科学力に感服するべきなのか。どちらかは分からないがこれで戦力も大幅に強化された。

だが、懸念は消えるわけにはいかない。

どう考えたって、奴ら “始告七神” はもう動き出してきてい

る。その理由として、篠ノ之が洗脳されたことがある。

篠ノ之は七月の誕生石に選ばれし者だから、と知っているのは輪廻に関わっている者が多数を占めるはず。まあ、彼女の場合は紅椿があるから洗脳されたとも考えられるので、その辺はもっと思慮しなければならぬ。

それよりも、気になるのは一夏に関わりがあるのかどうかだ。

知り合いと生死を賭けた戦いなんざしようとは思わないだろうし、ましてそれがかつての友人なら尚更だ。俺だって、姉さんとは出来ることなら戦いたくない。

だけれども、もう俺と姉さんはこのISでしか会話が出来ないだろう。……姉さんがそう選択するのなら、俺はそれに従って戦うだけだ。

『戦うことでは、自分を実感できない』

かつての俺はそう思っていた。

憎しみに満ちて、その憎悪が生きるための根源だった。

だが、今は違う。

俺の隣には、大切な人が ラウラがいてくれる。それだけで、俺は生きている価値が、意味がある。

「なあ、ラウラ」

そういえば、まだ言ってなかったな。

「なんだ」

「俺、ラウ』一年生の決勝戦に出場するペアは、所定の位置まで来てください、繰り返します……」

……。

「ヴァディム、なにかあるのか？」

「いや……、なんでもない。それよりも行くこつぜ」

なんだか、俺が何かアクションを起こそうとするといいい具合に興がそがれる気がしてならないんだが。これってどこの組織の陰謀だよ。

「いよいよ、あの小僧を捻り潰す時が来たようだ」

「なら、一夏の方は任せる」

「ヤ・ヴォール  
了解」

この試合前のやりとりも結構さまになってきたもので、ラウラも少し笑みを浮かべている。ただ単にこの試合が楽しめそうだからなのか、それとも……。いや、あまり考えたくないな。

俺は、自分がやるべきことをするだけ。

『それでは、両ペアは所定の位置について下さい。後三分で試合を開始します、繰り返します両ペアは……』

「さあ、行くぞ。ラウラ」

ラウラは返事をしなかったが、その瞳には勝利への決意が一番表れているようだった。

そこまでラウラを本気にさせる一夏に対して少しばかり嫉妬しながら、俺はアリーナへと降り立った。

「ようやく、この日が来たな」

「それはこっちの台詞だ、ラウラ」

「私は、許しはしない。教官から栄光を奪ったお前を」

「別に怒りとか憎しみはないんだけどさ、今回は負けられない。俺の覚悟を見せなければならぬんだ」

『五……』

カウントダウンが始まる、会場に緊張感が走る。

「僕だって、負ける訳にはいかないんだ」

『四……』

それぞれがそれぞれの決意を胸に、戦いへと意識を向けていく。

「残念だが、全ては一瞬だ。俺と戦うことを後悔するがいい」

『三……』

この決勝戦も最初から本気で行く、そうだろ。

『貴方がそう望むなら、それに従うだけです』

『一……』

一ツ、二ツ、三ツ……。

さあ、始めよう。

『一……、それでは』

ドゴオオオオン！！

カウントダウンが終わると同時に、強烈な爆発音がアリーナ全体を襲った。

それにより興がそがれた、というよりはあまりの緊急事態にこの試合を中断することを余儀なくされた俺達は、爆発が起きたアリーナの中央を見ていた。

「一夏、久しぶり」

「鈴……」

そこには、一夏の幼なじみらしき人物である人がいた。それでいて、篠ノ之に洗脳をかけた人物、奴ら　始告七神に関わる人物。

「筭に何をした」

その声には、多少の怒りが含まれていることが手に取るように分かる。

「さて、なんのことだが」

「ふざけるなよ、こっちは危険な目にあっていた友達がいたんだぞ」

「アタシには関係ないしね、人なんて全部一緒よ。特別な人間なんてほんとに一握り」

「何が言いたい」

一夏の問いに、あいつはこう応えた。

「アタシは仕事破壊をしに来たの、創造神の仰せのままにね」

「……始告七神か」

創造神、その言葉を聞いて思わず反応してしまった。

「あら、その様子じゃ知ってるんだ。って、知らなきゃおかしいもんね。だってアンタの姉は　」

「姉さんは関係ないっ!」

「中々に面白い反応するね……なによ」

あからさまに怪訝な態度をとっている、その目線の先にはアサルトライフルを構えたラウラがいた。

「破壊なんてさせない、ここは僕の居場所なんだっ」

そう言って、アサルトライフルで射撃しようとするが。

「邪魔」

「きゃっ、……あっ」

あいつが左手で一振り何かをしたと思ったら、とたんにシャルルが男とは思えないほど高い声（実は女の子なんだからしかたがない）で小さく悲鳴を上げて吹っ飛んでアリーナの壁に衝突していた。

「シャルっ!」

オープンチャンネルで一夏が叫ぶが、シャルルの応答はない。一体何が起きてるんだ？

「第三世代型の空間圧作用兵器、衝撃砲。名前は龍砲りゅうほう、砲台も弾丸も見えない最強の兵器。シールドエネルギーを超える一撃を与えることが可能で、その威力はそこで寝ているのを見ればわかるでしょ」

「……ラウラ、ちょっと下がっていてくれ」

「私は足手まといか？」

「そうじゃない。……ただ、この戦いはラウラには危険すぎる」

相手はきつとB S I Sだ、幾ら強化したからといってラウラが太刀打ちできる相手ではそうそうないはずだ。

「私は、お前を置いて逃げるわけにはいかない」

「ラウラっ、俺が心配してるのに……」

「なら、守ってくれ。私を」

「……」

そんなこと言われたらさ、もう逃げろなんて言えないじゃないか。

こんなに俺を信頼してくれているのに、それに対して俺は……。

「分かった、ラウラは俺が守る。絶対に」

「そろそろその茶番も終わった頃だよな？」

三対一、数や質なら多分こっちの方が上だが、相手には爆発的な攻撃力がある。それをどうやって対処するべきか……

「じゃあ、始めよう。“始告七神”第四の神“破壊神”<sup>ブレイカー</sup>、全てを破壊する神。……愚かなる人類に創造神の捌きを」

そんな不利をものともせず、あいつは闘志に満ちていた。

## 第十七話 好戦的な中国人（後書き）

いかがだったでしょうか。

これで原作のヒロイン五人が全員登場しました。

物語の都合上、鈴には敵側にまわってもらうことになりました。

これに関しても色々と理由はあるんですけども、それはまたいつか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3537y/>

---

十二のBSIS

2011年12月11日21時46分発行